

歌よみに与ふる書

— 他四編 —

正岡子規著

歌よみに与ふる書

— 他四編 —

正岡子規著

社団法人 国民文化研究会 発行



正岡子規像

中村不折筆

目次

歌よみに与ふる書……………(明治三十一年)	七
再び歌よみに与ふる書……………	九
三たび歌よみに与ふる書……………	二二
四たび歌よみに与ふる書……………	二五
五たび歌よみに与ふる書……………	二八
六たび歌よみに与ふる書……………	三二
七たび歌よみに与ふる書……………	三五
八たび歌よみに与ふる書……………	三七
九たび歌よみに与ふる書……………	三一
十たび歌よみに与ふる書……………	三五
あきまろに答ふ……………(明治三十一年)	三八
人々に答ふ……………(明治三十一年)	四一
「歌話」抄……………(明治三十二年)	七七
「墨汁一滴」……………(明治三十四年)	九四
編集あとがき・解説…………… 重畑連大学教授 夜久正雄……………	一〇九

歌よみに与ふる書

仰おほせの如ごとく近きん來らい和わ歌かは一向かうに振まひ不ま申ま候ま。正ま直ぢに申まし候まへば万ま葉え以い來らい実ま朝あ以い來らい一向かうに振まひ不ま申ま候ま。実ま朝あといふ人は三十さんじゅうにも足たらで、いざ是これからといふ処ところにてあへなき最さい期きを遂とげられ誠まことに殘ま念ねん致いた候ま。あの人をして今十年こんじゅうも活いかして置おいたならどんなに名な歌かを沢たく山さん殘ましたかも知しれ不ま申ま候ま。兎うに角かくに第だい一いつ流りゅうの歌か人と存ぞん候ま。強つよち人ひと丸まる赤あか人の余よ唾だを舐なるでも無なく固かたより貫つと之ゆ定てい家かの糟さう粕ぱくをしやぶるでも無なく自己じこの本ほん領りやう屹きつ然ぜんとして山やま獄ごくと高たかきを争まひ日ひ月げつと光ひかりを競あふ処ところ實まことに畏おそるべく尊たふとむべく覺おぼえず膝ひざを屈くつするの思しひ有あ之の候ま。古こ來らい凡ぼん庸ようの人ひとと評ひやうし來きたりしは必かならず誤あやなるべく北ほく条てう氏しを憚はばりて韜たう晦くわいせし人ひとかさらずば大だい器き晚ばん成せいの人ひとなりしかと覺おぼえ候ま。人ひとの上かみに立たつ人ひとにて文ぶん学がく技ぎ芸ぎに達たつしたらん者は人間にんげんとしては下した等とうの地ちに居ゐるが通つう例れいなれども実まこと朝あは全ぜんく例れい外がいの人ひとに相さう違たい無な之の候ま。何なに故ゆゑと申ますに実まこと朝あの歌かは只ただ器き用ようといふのでは無なく力ちから量りやうあり見み識しあり威い勢せいあり時とき流りゅうに染せんまず世よ間かんに媚こびざる処ところ例れいの物もの数ず寄よ連れん中ちゆうや死しに歌かよみの公こう卿けい達たちと迎むかひも同どう日にちには論ろんじ難がたく人間にんげんとして立た派はな見み識しのある人ひと間かんならでは実まこと朝あの歌かの如ごとき力ちからある歌かは詠よみいでられまじく候ま。真まこと淵えんは力ちからを極きまめて実まこと朝あをほめた人ひとなれども真まこと淵えんのほめ方かたはまだ足たらぬやうに存ぞん候ま。真まこと淵えんは実まこと朝あの歌かの妙めう

味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之候。これあるべくさふら。

真淵は歌に就きては近世の達見家にて万葉崇拜のところ抔當時に在りて実にえらいものに有之候へども生等の眼より見れば猶万葉をも褒め足らぬ心地致候。真淵が万葉にも善き調あり悪き調ありといふことをいたく気にして繰り返し申し候は世人が万葉中の佶屈なる歌を取りて「これだから万葉はだめだ」などと攻撃するを恐れたるかと相見え申候。固より真淵自身もそれらを善き歌とは思はざりし故に弱みもいで候ひけん。併しながら世人が佶屈と申す万葉の歌や真淵が悪き調と申す万葉の歌の中には生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。それを如何にといふに他の人は言ふまでも無く真淵の歌にも生が好む所の万葉調という者は一向に見当り不申候。(尤も此辺の論は短歌に就きての論と御承知可被下候)真淵の家集を見て真淵は存外に万葉の分らぬ人と呆れ申候。斯く申し候とて全く真淵をけなす訳にては無之候。楫取魚彦は万葉を摸したる歌を多く詠みいでたれど猶これと思ふ者は極めて少く候。左程に古調は擬し難きにやと疑ひ居候。近來生等の相知れる人の中に歌よみにはあらで却て古調を巧に摸する人少からぬことを知り申候。是に由りて観れば昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遙に劣り候やらんと心細く相成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候はんに如何申すべき。

長歌のみは稍々短歌と異なり申候。古今集の長歌などは箒にも棒にもかからず候へども簡様

な長歌は古今集時代にも後世にも余り流行らざりしこそもつけの幸と存ぜられ候なれ。されば後世にても長歌を詠む者には直に万葉を師とする者多く従つて可なりの作を見受け申候。今日とても長歌を好んで作る者は短歌に比すれば多少手際善く出来申候。(御歌会派の気まぐれに作る長歌などは端唄に劣り申候) 併し或る人は難じて長歌が万葉の模型を離るゝ能はざるを笑ひ申候。それも尤には候へども歌よみにそんなむづかしい事を注文致し候はゞ古今以後殆ど新しい歌が無いと申さねば相成間敷候。猶いろゝ申し残したる事は後鴻に譲り申候。不具。

(明治三十一年二月十二日)

再び歌よみに与ふる書

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之や古今集を崇拜するは誠に氣の知れぬことなど、申すものゝ実は斯く申す生も数年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する気味合は能く存申候。崇拜して居る間は誠に歌といふものは優美にて古今集は殊に其粹を抜きたる者とのみ存候ひしも三年の恋一朝にさめて見ればあんな意氣

地の無い女に今迄ばかされて居つた事かとかやしくも腹立たしく相成候。先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合の子を日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にてしやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異にて駄洒落か理窟ッぼい者のみに有之候。それでも強ひて古今集をほめて言はゞつまらぬ歌ながら万葉以外に一風を成したる処は取得にて如何なる者にて始めての者は珍しく覚え申候。只之を真似るをのみ芸とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事なら兎も角も二百年たつても三百年たつても其糟粕を嘗めて居る不見識に驚き入候。何代集の彼年代集のと申しても皆古今の糟粕の糟粕ばかりに御座候。

貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。嘗て或る人に斯く申候処其人が「川風寒み千鳥鳴くなり」の歌は如何にやと申され閉口致候。此歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。併し外にはこれ位のもの一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候。「人はいさ心もしらず」とは浅はかなる言ひざまと存候。但貫之は始めて簡様な事を申候者にて古人の糟粕にては無之候。詩にて申候へば古今集時代は宋時代にもたぐへ申すべく俗気紛々と致し居候処は亦も唐詩とくらぶべくも無之候へ共さりとて其を宋の特色として見れば全体の上より変化あるも面白く宋はそれにてよろしく候ひなん。それを本尊にして人の短所を真似る寛政

以後の詩人は善き笑ひ者に御座候。

古今集以後にては新古今稍々すぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候。併し其善き歌と申すも指折りて数へる程の事に有之候。定家といふ人は上手か下手か訳の分らぬ人にて新古今の撰定を見れば少しは訳の分つて居るのかと思へば自分の歌にはろくな者無之「駒とめて袖うちはらふ」「見わたせば花も紅葉も」杯が人にもてはやさるゝ位の者に有之候。定家を狩野派の画師に比すれば探幽と善く相似たるかと存候。定家に傑作無く探幽にも傑作無し。併し定家も探幽も相当に練磨の力はありて如何なる場合にも可なりにやりこなし申候。兩人の名譽は相如く程の位置に居りて定家以後歌の門閥を生じ探幽以後画の門閥を生じ両家とも門閥を生じたる後は歌も画も全く腐敗致候。いつの代如何なる技芸にても歌の格画の格などといふやうな格がきまつたら最早進歩致す間敷候。

香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之候。俗な歌の多き事も無論に候。併し景樹は善き歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ、只景樹時代には貫之時代よりも進歩して居る点があるといふ事は相違無ければ従つて景樹は貫之よりも善き歌が出来るといふも自然の事と存候。景樹の歌がひどく玉石混淆である処は俳人でいふと蓼太に比するが適當と被思候。蓼太は雅俗巧拙の兩極端を具へた男で其句に兩極端が現れ居候。且つ満身の覇気でもつて世人を籠絡し全国

に夥おびただしき門派の末流をもつて居た処なども善く似て居るかと思存候。景樹を学ぶなら善き処を学ばねば甚だしき邪路に陥り可申今の景樹派などと申すは景樹の俗な処を学びて景樹よりも下手につらね申候。ちゞれ毛の人が束髪に結びしを善き事と思ひて束髪そくはつにゆふ人はわざ／＼毛をちぢらしたらんが如き趣有之候。この処よく／＼濶眼を開いて御判別可有候。古今上下東西しやうかの文学など能く比較して御覽可被成みなとるべくくだらぬ歌書ばかり見て居つては容易に自己の迷を醒まし難く見る所狭ければ自分の汽車の動くのを知らず鄰の汽車が動くやうに覚ゆる者に御座候。不ふ尽じん。

(二月十四日)

三たび歌よみに与ふる書

前略。歌よみの如く馬鹿な、のんきなものは、またと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうに自惚候次第に有之候。彼等は歌に最も近き俳句すら少しも解せず十七字でさへあれば川柳も俳句も同じと思ふ程の、のんきさ加減なれば、況まして支那の詩を研究するでも

無く西洋には詩といふものが有るやら無いやらそれも分らぬ文盲浅学、況して小説や院本も和歌と同じく文学といふ者に属すと聞かば定めて目を剝いて驚き可申候。斯く申さば讒謗罵詈訕を知らぬしれ者と思ふ人もあるべけれど實際なれば致方無之候。若し生の言が誤れりと思さば所謂歌よみの中より只の一人にても俳句を解する人を御指名可被下候。生は歌よみに向ひて何の恨も持たぬに斯く罵詈がましき言を放たねばならぬやうに相成候心の程御察被下度候。

歌を一番善いと申すは固より理窟も無き事にて一番善い訳は毫も無之候。俳句には俳句の長所あり、支那の詩には支那の詩の長所あり、西洋の詩には西洋の詩の長所あり、戯曲院本には戯曲院本の長所あり其長所は固より和歌の及ぶ所にあらず候。理窟は別とした処で一体歌よみは和歌を一番善い者と考へた上でどうする積りにや、歌が一番善い者ならばどうでもかうでも上手でも下手でも三十一文字竝べさへすりや天下第一の者であつて秀逸と称せらるゝ俳句にも漢詩にも洋詩にも優りたる者と思ひ候者にや其量見が聞きたく候。最も下手な歌も最も善き俳句漢詩等に優り候程ならば誰も俳句漢詩等に骨折る馬鹿はあるまじく候。若し又俳句漢詩等にも和歌より善き者あり、和歌にも俳句漢詩等より悪き者ありといふならば和歌ばかりが一番善きにもあるまじく候。歌よみの浅見には今更のやうに呆れ申候。

俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申し候。これは強ち一人の論では無く歌よみ仲間には箇様な説を抱く者多き事と存候。歌よみどもはいたく調

といふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な様を歌ふにはなだらかなる長き調を用ふべく、悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく変化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用ふべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは調は総てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る誤を来すも畢竟従来の和歌がなだらかなる調子のみを取り来りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず歌集ばかりを読みたる歌よみには爾か思はるゝも無理ならぬ事と存候。さて、困つた者に御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なる事は分り申さざるやらん。併し迫りたる調強き調などいふ調の味は所謂歌よみには到底分り申す間敷か。真淵は雄々しく強き歌を好み候へどもさて其歌を見ると存外に雄々しく強き者は少く、実朝の歌の雄々しく強きが如きは真淵には一首も見あたらず候。「飛ぶ鷺の翼もたわに」などいへるは真淵集中の佳什にて強き方の歌なれども意味ばかり強くて調子は弱く感ぜられ候。実朝をして此意匠を詠ましめば箇様な調子には詠むまじく候。「ものこのふの矢なみつくろふ」の歌の如き鷺を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向ならねど調子の強き事は竝ぶ者無く此歌を誦すれば霞の音を聞くが如き心地致候。真淵既に然りとせば真淵以下の歌よみは申す迄も無く候。斯る歌よみに蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か読ませたく存候へども、驕りきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を読むことは承知致すまじく勸めるだけが野暮にや候べき。

御承知の如く生は歌よみよりは局外者とか素人とかいはるゝ身に有之従つて詳しき歌の学問は致さず格が何だか文法が何だか少しも承知致さず候へども大体の趣味如何に於ては自ら信ずる所あり此点に就きて却て専門の歌よみが不注意を責むる者に御座候。簡様に悪口をつき申さば生を弥次馬連と同様に見る人もあるべけれど生の弥次馬連なるか否かは貴兄は御承知の事と存候。異論の人あらば何人なんどにでも来訪あるやう貴兄より御伝へ被下度三日三夜なりともつゞけざまに議論可致候。熱心の点に於ては決して普通の歌よみどもには負け不申候。情激し筆走り候まゝ失礼の語も多かるべく御海容可被下候。拜具。(二月十八日)

四たび歌よみに与ふる書

拜啓。空論ばかりにては傍人に解し難く实例に就きて評せよとの御言葉御尤と存候。实例と申しても際限も無き事にていづれを取りて評すべきやらんと惑ひ候へども成るべく名高き者より試み可申候。御思ひあたりの歌ども御知らせ被下度候。さて人丸の歌にかありけん、

ものゝふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

といふが屢々引きあひに出されるやうに存候。此歌万葉時代に流行せる一気呵成の調にて少しも野卑なる処は無く字句もしまり居り候へども全体の上より見れば上三句は贅物に属し候。

「足引の山鳥の尾の」といふ歌も前置の詞多けれどあれは前置の詞長きために夜の長き様を感じぜられ候。これは又上三句全く役に立ち不申候。此歌を名所の手本に引くは大たはけに御座候。総じて名所の歌といふは其の地の特色なくては叶はず此歌の如く意味無き名所の歌は名所の歌になり不申候。併し此歌を後世の俗気紛々たる歌に比ぶれば勝ること万々に候。且つ此種の歌は真似すべきにあらねど多き中に一首二首あるは面白く候。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

といふ歌は最も人の賞する歌なり。上三句はすらりとして難無けれども下二句は理窟なり蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶる者なるに理窟を述ぶるは歌を知らぬ故にや候らん。此歌下二句が理窟なる事は消極的に言ひたるにても知れ可申、若し我身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども秋ではないがと当り前の事をいはゞ理窟に陥り申候。筒様な歌を善しと思ふは其人が理窟を得離れぬがためなり、俗人は申すに及ばず今の所謂歌よみどもは多く理窟を並べて楽

み居候。厳格に言はゞ此等は歌でも無く歌よみでも無く候。

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは桜なりけり

八田知紀はつた ともりのりの名歌とか申候。知紀の家集はいまだよまねどこれが名歌ならば大概底も見え透き候。此も前と同じく「霞の奥は知らねども」と消極的に言ひたるが理窟に陥り申候。既に見ゆる限りはといふ上は見えぬ処は分らぬがといふ意味は其裏に籠り居り候ものをわざ／＼知らねどもとことわりたる、これが下手と申すものに候。且此歌の姿、見ゆる限りは桜なりけりなどいへるも極めて拙く野卑なり、前の千里の歌は理窟こそ悪けれ姿は遙に立ちまさり居候。序に申さんに消極的に言へば理窟になると申し、事いつでもしかなりといふに非ず、客観的の景色を連想していふ場合は消極にても理窟にならず、例へば「駒とめて袖うち払ふ影もなし」といへるが如きは客観の景色を連想したる迄にて斯くいはねば感情を現す能はざる者なれば無論理窟にては無之候。又全体が理窟めきたる歌あり（釈教の歌の類）、これらは却て言ひ様にて多少の趣味を添ふべけれど、此芳野山の歌の如く全体が客観的即ち景色なるに其中に主観的理窟の句がまじりては殺風景いはん方無く候。又同人の歌にかありけん、

うつせみの我世の限り見るべきは嵐の山の桜なりけり

といふが有之候由さてく、驚き入つたる理窟的の歌にては候よ。嵐山の桜のうつくしいと申すは無論客観的の事なるにそれを此歌は理窟的に現したり、此歌の句法は全体理窟的の趣向の時に用ふべき者にして、此趣向の如く客観的にいはざるべからざる処に用ゐたるは大俗のしわざと相見え候。「べきは」と係けて「なりけり」と結びたるが最理窟的殺風景の処に有之候。一生嵐山の桜を見ようといふも変なくだらぬ趣向なり、此歌全く取所無之候。猶手当り次第可申上候也。(二月二十一日)

五たび歌よみに与ふる書

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ不尽の嶺

といふは春海はるみのなりしやに覚え候。これは不尽の裾より見上げし時の即興なるべく生も實際に斯く感じたる事あれば面白き歌と一時は思ひしが今見れば拙き歌に有之候。第一、麓といふ語如何や、心あてに見し処は少くも半腹位の高さなるべきをそれを麓といふべきや疑はしく候。

第二、それは善しとするも「麓にて」の一句理窟ほくなつて面白からず、只心あてに見し雲よりは上にありしとばかり言はねばならぬ処に候。第三、不尽の高く壮なる様を詠まんとならば今少し力強き歌ならざるべからず、此の歌姿弱くして到底不尽に副ひ申さず候。几董の俳句に「晴るゝ日や雲を貫く雪の不尽」といふがあり、極めて尋常に敍し去りたれども不尽の趣は却て善く現れ申候。

もしほ焼く難波の浦の八重霞一重はあまのしわざなりけり

契冲の歌にて俗人の伝称する者に有之候へども此歌の品下りたる事は稍々心ある人は承知致居事と存候。此歌の伝称せらるゝはいふ迄も無く八重一重の掛合にあるべけれども余の攻撃点も亦此処に外ならず、総じて同一の歌にて極めてほめる処と他の人の極めて誹る処とは同じ点に在る者に候。八重霞というもの固より八段に分れて霞みたるにあらねば一重といふこと一向に利き不申、又初に「藻汐焼く」と置きし故後に煙とも言ひかねて「あまのしわざ」と主観的に置きたる処いよく俗に墮ち申候。こんな風に詠まずとも、霞の上に藻汐焚く煙のなびく由尋常に詠まばつまらぬ迄も厭味は出来申間敷候。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

此躬恆みづねの歌百人一首にあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のねうちも無之駄歌に御座候。此歌は謔の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。趣向謔なれば趣も糸へ瓜まも有之不申、蓋しそれはつまらぬ謔なるが故につまらぬにて、上手な謔は面白く候。例へば「鵲かささぎのわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」面白く候。躬恆のは瑣細な事を矢鱈に仰山に述べたのみなれば無趣味なれども家持やかもちのは全く無い事を空想で現はして見せたる故面白く被感候。謔を詠むなら全く無い事とてつものなき謔を詠むべし、然らざれば有の儘に正直に詠むが宜しく候。雀が舌を剪られたとか狸が婆に化けたなどの謔は面白く候。今朝は霜がふつて白菊が見えんなど、真面目らしく人を欺く仰山的の謔は極めて殺風景に御座候。「露の落つる音」とか「梅の月が匂ふ」とかいふ事をいふて楽む歌よみが多く候へども是等も面白からぬ謔に候。総て謔といふものは一二度は善けれどたび／＼詠まれては面白き謔も面白からず相成申候。況して面白からぬ謔はいふ迄も無く候。「露の音」「月の匂」「風の色」などは最早十分なれば今後の歌には再び現れぬやう致したく候。「花の匂」などいふも大方は謔なり、桜などには格別の匂は無之、「梅の匂」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ

「梅闇に匂ふ」とこれだけで済む事を三十一文字に引きのばしたる御苦勞さ加減は恐れ入つた

者なれど、これも此頃には珍しき者として許すべく候はんに、あはれ歌人よ「闇に梅匂ふ」の趣向は最早打どめに被成ては如何や。闇の梅に限らず普通の香も古今集だけにて十余りもあり、それより今日迄の代々の歌よみがよみし梅の香はおびたゞしく数へられもせぬ程なるに、これも善い加減に打ちとめて香水香料に御用ゐる被成候は格別、其外歌には一切之を入れぬ事とし鼻つまりの歌人と嘲らるゝ程に御遠ざけ被成ては如何や。小さき事を大きくいふ諷が和歌腐敗の一大原因と相見え申候。(二月二十三日)

六たび歌よみに与ふる書

御書面を見るに愚意を誤解被致候。殊に變なるは御書面中四五行の間に撞著有之候。初に「客観的景色に重きを置きて詠むべし」とあり次に「客観的にのみ詠むべきものとも思はれず」云々とあるは如何。生は客観的ののみ歌を詠めと申したる事は無之候。客観に重きを置けと申したる事も無けれど此方は愚意に近きやう覚え候。「皇国の歌は感情を本として」云々とは何の

事に候や。詩歌に限らず総ての文学が感情を本とする事は古今東西相異なるべくも無之、若し感情を本とせずして理窟を本としたる者あらばそれは歌にても文学にてもあるまじく候。故らに皇国の歌はなど言はるゝは例の歌より外に何物も知らぬ歌よみの言かと被怪候。「何れの世に何れの人が理窟を詠みては歌にあらざと定め候哉」とは驚きたる御問に有之候。理窟が文学に非ずとは古今の人東西の人尽く一致したる定義にて、若し理窟をも文学なりと申す人あらばそれは大方日本の歌よみならんと存候。

客観主観感情理窟の語に就きて或は愚意を誤解被致居にや。全く客観的に詠みし歌なりとも感情を本としたるは言を俟たず。例へば橋の袂に柳が一本風に吹かれて居るといふことを其儘歌にせんには其歌は客観的なれども、元と此歌を作るといふは此客観的景色を美なりと思ひし結果なれば感情に本づく事は勿論にて只うつくしいとか綺麗とかうれしいとか楽しいとかいふ語を著くると著けぬとの相異に候。又主観的と申す内にも感情と理窟との区別有之、生が排斥するは主観中の理窟の部分にして、感情の部分には無之候。感情的主観の歌は客観の歌と比して、此主客両観の相異の点より優劣をいふべきにあらず、されば生は主観に重きを置く者にても無之候。但和歌俳句の如き短き者には主観的佳句よりも客観的佳句多しと信じ居候へば客観的に重きを置くというも此処の事を意味すると見れば差支無之候。又主観客観の區別、感情理窟の限界は實際判然したる者に非ずとの御論は御尤に候。それ故に善悪可否巧拙と評するも固

より劃然たる區別あるに非ず巧の極端と拙の極端とは毫も紛るゝ所あらねど巧と拙との中間に在る者は巧とも拙とも申し兼候。感情と理窟の中間に在る者は此場合に當り申候。

「同じ用語同じ花月にては其れに對する吾人の觀念と古人のと相異なる事珍しからざる事にて」云々それは勿論の事なれどそんな事は生の論ずることゝ毫も關係無之候。今は古人の心を付度する必要無之、只此処にては古今東西に通ずる文学の標準（自ら斯く信じ居る標準なり）を以て文学を論評する者に有之候。昔は風帆船が早かつた時代もありしかど蒸汽船を知りて居る眼より風帆船は遅しと申すが至当の理に有之、貫之は貫之時代の歌の上手とするも前後の歌よみを比較して貫之より上手の者外に沢山有之と思はゞ貫之を下手と評すること亦至當に候。歴史的に貫之を褒めるならば生も強ち反對にては無之候へども只今の論は歴史的に其人物を評するにあらず、文学的に其歌を評するが目的に有之候。

「日本文学の城壁とも謂ふべき国歌」云々とは何事ぞ、代々の勅撰集の如き者が日本文学の城壁ならば実に頼み少き城壁にて此の如き薄ッべらな城壁は大砲一発にて滅茶々に碎け可申候。生は国歌を破壊し尽すの考にては無之、日本文学の城壁を今少し堅固に致し度、外国の髯づら共が大砲を發たうが地雷火を仕掛けうが、びくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有之、しかも生を助けて此心願を成就せしめんとする大檀那は天下一人も無く数年来鬱積沈滞せる者頃日漸く出口を得たる事とて前後錯雜序次倫無く大言疾呼我ながら狂せるかと存候程の次第に御

座候。傍人より見なば定めて狂人の言とさげすまるゝ事と存候。猶此度新聞の余白を借り得たるを機とし思ふ様愚考も述べたく、それ丈にては愚意分りかね候に付愚作をも連ねて御評願ひ度存居候へども或は先輩諸氏の怒に触れて差止めらるゝやうな事は無きかとそのみ心配罷在候。心配恐懼、喜悅、感慨、希望等に悩まされて従来ひつこの病体益々神経の過敏を致し日来睡眠に不足を生じ候次第愚とも狂とも御笑ひ可被下候。

従来ひつこの和歌を以て日本文学の基礎とし城壁と為さんとするは弓矢劍槍を以て戦はんとすると同じ事にて明治時代に行はるべき事にては無之候。今日軍艦を購ちかひひ大砲を購ちかひひ巨額の金を外国に出すも畢竟日本国を固むるに外ならず。されば僅少の金額にて購ちかひひ得べき外国の文学思想杯は続々輸入して日本文学の城壁を固めたく存候。生は和歌に就きても舊思想を破壊して新思想を注文するの考にて随つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候。委細後便。

追て、伊勢の神風、宇佐の神勅云々の語あれども文学には合理非合理を論ずべき者にては無之、従つて非合理は文学に非ずと申したる事無之候。非合理の事にて文学的には面白き事不少候。生の写真と申すは合理非合理事実非事実の謂にては無之候。油画師は必ず写生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く書き申候。併し神や妖怪を画くにも勿論写生に依るものにて、只々有りの儘を写生すると一部々々の写生を集めるとの相異に有之、生の写真も同様の事に候。是等は大誤解に候。(二月二十四日)

七たび歌よみに与ふる書な

前便に言残し候事今少し申上候。宗匠的俳句と言へば直ちに俗氣を聯想するが如く和歌といへば直ちに陳腐を聯想致候が年来の習慣にて、はては和歌といふ字は陳腐といふ意味の字の如く思はれ申候。斯く感ずるもの和歌社会には無之と存候へど歌人ならぬ人は大方箇様の感を抱き候やに承り候。をりくは和歌を誹る人に向ひてさて和歌は如何様に改良すべきかと尋ね候へば其人が首をふつて、いやとよ和歌は腐敗し尽したるに、いかでか改良の手だてあるべき、置きねくなど言ひなし候様は恰も名医が匙を投げたる死際の病人に対するが如き感を持ち居候者と相見え申候。實にも歌は色青ざめ呼吸絶えんとする病人の如くにも有之候よ。さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰へたれ形骸は猶保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳驅するを得べき事を保証致候。こはいはでもの事なるを或る人が、はやこと切れたる病人と一般に看做し候は如何にも和歌の腐敗甚しきに呆れて一見して放棄したる者にや候べき。和歌の腐敗の甚しさもこれにて大方知れ可申候。

此腐敗と申すは趣向の変化せざるが原因にて、又趣向の変化せざるは用語の少きが原因と被

存候。故に趣向の変化を望まば是非とも用語の区域を広くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も変化可致候。ある人が生を目して和歌の区域を狭くする者と申し候は誤解にて少しにても広くするが生の目的に御座候。とはいへ如何に区域を広くするとも非文学的思想は容れ不申、非文学的思想とは理窟の事に有之候。

外国語も用ゐるよ外国に行はるゝ文学思想も取れよと申す事に就きて日本文学を破壊する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも將たサンスクリット詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文学に相違無之候。唐制に摸して位階も定め服色も定め置き唐ぶりたる冠衣を著け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英国の軍艦を買ひ独国の大砲を買ひ、それで戦に勝ちたりとも運したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。併し外国の物を用ふるは如何にも残念なれば日本固有の物を用ゐんと考ならば其の志には賛成致候へども迎も日本物の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文学にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる者か出来候べき。源氏物語、枕草子以下漢語を用ゐたる物を排斥致し候はゞ日本文学は幾何か残り候べき。それでも瘦我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらばそは御勝手次第ながら其を以て他人を律するは無用の事に候。日本人が皆日本固有の語を用ふるに至らば日本は成り立つまじく日本文学者が皆日本固有の語を用ゐたらば日本文学は破滅

可致候。

或は姑息にも馬、梅、蝶、菊、文等の語はいと古き代より用ゐる来りたれば日本語と看做すべしなどいふ人も可有之候へど、いと古き代よの人は其頃新しく輸入したる語を用ゐたる者にて、此姑息論者が当時に生れ居らばそれをも排斥致し候ひけん。いと笑ふ可き撞著に御座候。仮に姑息論者に一步を籍かして古き世に使ひし語のみ用ふるとして、若し王朝時代に用ゐし漢語だけにても十分に之を用ゐなば猶和歌の变化すべき余地は多少可有之候。されど歌の詞と物語の詞とは自ら別なり。物語などにある詞にて歌には用ゐられぬが多きなど例の歌よみは可申候。何たる笑ふ可き事には候ぞや。如何なる詞にても美の意こころを運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申、之を外にして歌の詞といふ者は無之候。漢語にても洋語にても文学的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。(二月二十八日)

八たび歌よみに与ふる書

悪わき歌の例を前に挙げたれば善よき歌の例をこゝに挙げ可申候。悪わき歌といひ善よき歌といふも

四つや五つばかり挙げたりとて愚意を尽すべくも候はねど無きには勝りてんと聊いさづらか列つらね申候。
先づ金槐和歌集などより始め申さんか。

武士ものぶの矢やま並なみつুকろふ小手こての上に霰あられたばしる那須なすの篠原

といふ歌は万口一斉に歎賞するやうに聞き候へば今更取り出でゝいはでもの事ながら猶御氣のつかれざる事もやと存候まゝ一応申上候。此歌の趣味は誰しも面白しと思ふべく又此の如き趣向が和歌には極めて珍しき事も知らぬ者はあるまじく又此歌が強き歌なる事も分り居り候へども、此種の句法が殆ど此歌に限る程の特色を為し居るとは知らぬ人多く候べき。普通に歌はなり、けり、らん、かな、けれ杯の如き助辞を以て幹旋せらるゝにて名詞の少きが常なるに、此歌に限りては名詞極めて多く「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一、二個の動詞も現在になり（動詞の最短き形）居候。此の如く必要なる材料を以て充実したる歌は実に少く候。新古今の中には材料の充実したる句法の緊密なる稍々此歌に似たる者あれど、猶此歌の如くは語々活動せざるを覚え候。万葉の歌は材料極めて少く簡單を以て勝る者、実朝一方には此万葉を擬し一方には此かくの如く破天荒の歌を為す。其力量実に測るべからざる者有之候。又晴を祈る歌に

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ

といふがあり恐らくは世人の好まざる所と存候へどもこは生の好きでくたまらぬ歌に御座候。此の如く勢強き恐ろしき歌はまたと有之間敷、八大竜王を叱咤する処竜王も懾伏致すべき勢相現れ申候。八大竜王と八字の漢語を用ゐたる処、雨やめたまへと四三の調を用ゐたる処、皆此歌の勢を強めたる所にて候。初三句は極めて拙き句なれども其一直線に言ひ下して拙き処、却て其真率偽りなきを示して祈晴の歌などには最も適當致居候。実朝は固より善き歌作らんとて之を作りしにもあらざるべく只々真心より詠み出でたらんがなか／＼善き歌とは相成り候ひしやらん。こゝらは手のさきの器用を弄し言葉のあやつりにのみ拘る歌よみどもの思ひ至らぬ所に候。三句切の事は猶他日詳に可申候へども三句切の歌にぶつゝかり候故一言致置候。三句切の歌詠むべからずといふは守株の論にて論ずるに足らず候へ共三句切の歌は尻軽くなるの弊有之候。此弊を救ふために下二句の内を字余りにする事屢々有之、此歌も其一にて（前に挙げたる大江千里の月見ればの歌も此例尚其外にも数へ尽すべからず）候。此歌の如く下を字余りにする時は三句切にしたる方却りて勢強く相成申候。取りも直さず此歌は三句切の必要を示したる者に有之候。又

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

の如き何も別にめづらしき趣向もなく候へども一気呵成の処却て真心を現して余りあり候。序

に字余りの事一寸申候。此歌は第五句字余り故に面白く候。或る人は字余りとは余儀なくする者と心得候へどもさにあらず、字余りには凡三種あり、第一、字余りにしたるがために面白き者、第二、字余りにしたるがため悪き者、第三、字余りにするともせずとも可なる者と相分れ申候。其中にも此歌は字余りにしたるがため面白き者に有之候。若し「思ふ」といふをつめて「もふ」など吟じ候はんには興味索然と致し候、こゝは必ず八字に読むべきにて候。又此歌の最後の句にのみ力を入れて「親の子を思ふ」とつめしは情の切なるを現す者にて、若し「親の」の語を第四句に入れ最後の句を「子を思ふかな」「子や思ふらん」など致し候はゞ例のやさしき調となりて切なる情は現れ不申、従つて平凡なる歌と相成可申候。歌よみは古來助辭を濫用致し候様宋人そうびとの虚字を用ゐて弱き詩を作ると一般に御座候。実朝の如きは実に千古の一人と存候。

前日来 生は客観詩をのみ取る者と誤解被致候ひしも其の然らざるは右の例にて相分り可申、那須の歌は純客観、後の二首は純主観にて共に愛誦する所に有之候。併し此の三首ばかりにては強き方に偏し居候へば或は又強き歌をのみ好むかと被考候はん。尚多少の例歌を挙ぐるを御待可被下候。(三月一日)

九こゝのたび歌よみに与ふる書

一々に論ぜんもうるさければ只々二三首を挙げ置きて金槐集以外に遷うつり候べく候。

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも

箱根路をわが越え来れば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ

世の中はつねにもがもななぎさ漕あぐ海人の小舟の綱手かなしも

大海のいそもとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

箱根路の歌極めて面白けれども斯る想は古今に通じたる想なれば実朝が之を作りたりとて驚くにも足らず、只々「世の中は」の歌の如く古意古調なる者が万葉以後に於てしかも華麗を競

ひたる新古今時代に於て作られたる技倆には驚かざるを得ざる訳にて実朝の造詣の深き今更申すも愚かに御座候。大海の歌実朝のはじめたる句法にや候はん。

新古今に移りて二三首を挙げんに

なごの海の霞のまよりながむれば入日を洗ふ沖つ白波

(実定)

此歌の如く客観的に景色を善く写したるものは新古今以前にはあらざるべくこれらも此集の特色として見るべき者に候。惜むらくは「霞のまより」といふ句が瑾きんにて候。一面にたなびきたる霞に間といふも可笑しく、縦たし間ありともそれは此の趣向に必要ならず候。入日も海も霞みながらに見ゆるこそ趣は候なれ。

ほのぼのと有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風

(信明)

これも客観的の歌にてけしきも淋しく艶なるに語を畳みかけて調子取りたる処いとめづらかに覚え候。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵いほを竝べん冬の山里

(西行)

西行の心はこの歌に現れ居候。「心なき身にも哀れは知られけり」などいふ露骨的の歌が世

にもてはやされて此歌などは却て知る人少きも口惜く候。庵を竝べんといふが如き斬新にして趣味ある趣向は西行ならでは得言はざるべく特に「冬の」と置きたるも亦尋常歌よみの手段にあらずと存候。後年芭蕉が新に俳諧を興せしも寂は「庵を竝べん」などより悟入し、季の結び方は「冬の山里」などより悟入したるに非ざるかと被思候。

閨ねやの上にかたえさしおほひ外面とらもなる葉広柏はひろがしほに霰あられふるなり

(能因)

これも客観的の歌に候。上三句複雑なる趣を現さんとて稍々混雑に陥りたれど葉広柏に霰のはじく趣は極めて面白く候。

岡の辺の里のあるじを尋ぬれば人は答へず山おろしの風

(慈円)

趣味ありて句法もしつかりと致し居候。此種の歌の第四句を「答へで」などいふが如く下に連続する句法となさば何の面白味も無之候。

さよ波や比良山風の海吹けば釣する蟹あまの袖かへる見ゆ

(読人しらす)

实景を其儘に写し些さの巧たくみを弄ばぬ所却て興多く候。

神風や玉串の葉をとりかざし内外うちとの宮に君をこそ祈れ

(俊恵)

神祇じんぎの歌といへば千代の八千代のと定文句きまりを竝ぶるが常なるに此歌はすつばりと言ひはなしたるなか／＼に神の御心になふべく覚え候。句のしまりたる所半ば客観的に叙したる所など注意すべく神風やの五字も訳なきやうなれど極めて善く響き居候。

阿耨多羅三藐三菩提あつくだらさんみやくさんぼだいの仏たちわが立つ柚つゆに冥加みやうがあらせたまへ

(伝教)

いとめでたき歌にて候。長句の用ゐ方など古今未曾有にてこれを詠みたる人もさすがなれど此歌を勅撰集に加へたる勇氣も称するに足るべくと存候。第二句十字の長句ながら成語せいごなれば左迄口にたまらず、第五句九字にしたるはことさらにもあらざるべけれど此所はことさらにも九字位にする必要有之、若し七字句などを以て止めたらんには上の十字句に対して釣合取れ不申候。初めの方に字余りの句あるがために後にも字余りの句を置かねばならぬ場合は屢々有之候。若し字余りの句は一句にても少きが善しなどいふ人は字余りの趣味を解せざるものにや候べき。(三月三日)

十たび歌よみに与ふる書

先輩崇拜といふことは何れの社会にも有之候。それも年長者に対し元勲に相当の敬意を尽すの意ならば至当の事なれどもそれと同時に何かは知らず其人の力量技術を崇拜するに至りては愚の至りに御座候。田舎の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの様に考へ、従て其人の歌と聞けば読まぬ内からはや善き者と定め居るなどありうちの事にて生も昔は其仲間の一人に候ひき。今より追想すれば赤面する程の事に候。御歌所とてえらい人が集まる筈も無く御歌所長とて必ずしも第一流の人が坐るにもあらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無の時なれどそれでも御歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有之候。田舎の者が元勲を崇拜し大臣をえらい者に思ひ政治上の力量も識見も元勲大臣が一番に位する者と迷信致候結果新聞記者などが大臣を誹るを見て「いくら新聞屋が法螺吹いたとて、大臣は親任官、新聞屋は素寒貧、月と泥亀程の違ひだ」などと罵り申候。少し眼のある者は元勲がどれ位無能力かといふ事大臣は廻り持にて新聞記者より大臣に上りし実例ある事位は承知致し説き聞かせ候へども田舎の先生は一向無頓著にて不相変元勲崇拜なるも腹立たしき訳に候。

あれ程民間にてやかましくいふ政治の上猶然りとすれば今迄隠居したる歌社会うたしやくわいに老人崇拜の田舎者多きも怪むに足らねども此老人崇拜の弊を改めねば歌は進歩不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば老人杯にかまはず勝手に歌を詠むが善かるべしと御伝言可被下候。明治の漢詩壇が振ひたるは老人そつちのけにして青年の詩人が出たる故に候。俳句の観を改めたるも月並連に構はず思ふ通りを述べたる結果に外ならず候。

縁語えんごを多く用ふるは和歌の弊なり、縁語も場合によりては善けれど普通には縁語かけ合せなどあればそれがために歌の趣を損ずる者に候。縦し言ひおほせたりとて此種の美は美の中の下等なる者と存候。無暗むあんに縁語を入れたがる歌よみは無暗に駄洒落を並べたがる半可通と同じく御当人は大得意なれども側たはより見れば品の悪き事夥おほたしく候。縁語に巧を弄せんよりは真率に言ひながしたるが余程上品に相見え申候。

歌といふといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ほたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯ういふしきたりの者ぞなど言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考とは異り居候。愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く只々自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本来の主意しゆいに御座候。故に俗語を用ゐたる方其の美感を現すに適せりと思はば

雅語を捨て、俗語を用ゐ可申、又古來のしきたりの通りに詠むことも有之候へどそれはしきたりなるが故に其を守りたるにては無之其の方が美を現すに適せるがために之を用ゐたる迄に候。古人のしきたりなど申せども其の古人は自分が新たに用ゐたるぞ多く候べき。

牡丹と深見草との區別を申さんに生等には深見草といふよりも牡丹といふ方が牡丹の幻影早く著く現れ申候。且つ「ぼたん」といふ音の方が強くして實際の牡丹の花の大きく凜としたる所に善く副ひ申候。故に客觀的に牡丹の美を現はさんとすれば牡丹と詠むが善き場合多かるべく候。

新奇なる事を詠めといふと、汽車、鉄道などいふ所謂文明の器械を持ち出す人あれど大に量見が間違ひ居り候。文明の器械は多く不風流なる者にて歌に入り難く候へども若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物も無く「レールの上に風が吹く」などとやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に莖が咲いて居るとか、又は汽車の過ぎた後で罌粟けしが散るとか薄うすがそよぐとか言ふやうに他物を配合すればいくらも見よくなるべく候。又殺風景なる者は遠望する方宜しく候。菜の花の向ふに汽車が見ゆるとか、夏草の野末を汽車が走るとかするが如きも殺風景を消す一手段かと存候。

いろ／＼言ひたき儘取り集めて申上候。猶他日詳かに申上ぐる機会も可有之候。以上。月日。

(明治三十一年三月四日)

あきまろに答ふ

「も」の字に就きて質問に御答申候。「も」の字は元來理窟的の言葉にて、俳句などには「も」の字の有無を以て月並的俗句なるか否かを判ずる事さへある位に候へども、さりとして「も」の字尽く理窟なるにも無之候。拙作に対する質問に答へんは弁護がましく聞えて心苦しき限りながら議論は議論にて巧拙の評にあらねば愚意試に可申述候。

「も」の字にも種類ありて「桜の影をふむ人もなし」「人も来ず春行く庭の」「屍かばねをさむる人もなし」などいへる「も」は殆ど意味無き「も」にて「人なし」「人来ず」といへると大差なければ理窟を含まず、又「梅咲きぬ鮎あなづなものぼりぬ」の「も」は梅と鮎とを相並べていふ者なればこれも理窟には相成不申候。実朝の「四方の獸すらだにも」は稍々理窟めきて聞ゆる「も」にて「老いゆく鷹の羽ばたきもせず」「あら鷹も君が御鳥屋みとやに」の二つは稍々之に似たる者に有之候。其理窟めきて聞ゆるは二事二物を相對して言ふ意味ながら一事一物をのみ現し他を略したるが為にして、例へば獸だに子を思ふといふは況して人は子を思ふといふ事を含み、羽ば

たきもせずといふは況して飛び去らんともせずといふことを含み、あら鷹もといふは其外の鷹もといふ意を含むが如き者に候。併し此獸の歌も鷹の歌も全体理窟づめにしたる歌には無之悲哀感慨を述べたる者と見て差支無かるべく候。(羽ばたきもせずの歌稍々理窟めきたるは「ほだして」の語あるがためにして「も」の論とは異なり)

歌に就きても今迄大体を示すに忙しく細論するの機なく候処「も」の字の实地論出で候まま「理窟」といふことをこゝに詳述可致候。心理学者が普通にいふ如く心の働きを知情意の三に分てば、前日来「歌は感情的ならざるべからず」などいひし感情とは此「情」の一部分にして例の理窟とは「智」の一部分に相当申候。然らば理窟とは「智」の如何なる部分かといふに劃然と其の限界を示す能はざれども要するに智の最も複雑したる部分が程度の高き理窟にて、それが簡単になればなる程、程度の低き理窟となる訳に候。今迄用ゐたる理窟といふ語は最も簡単な智をば除きて言ひし積りなれど貴書の意は智と理窟とを同一に看做されたるかと覚え候。論理的に嚴肅に議論せんとする場合には後説の方或は宜しかるべく、さうすれば理窟の内でも程度の理窟は文学的として之を許し、高度の理窟は非文学的として之を排斥する訳に相成申候。此低度の理窟即ち最簡單の智とは記憶比較の類の如き者にして、如何なる純粹の文学的感情といへども多少の記憶力比較力を交へざる時は文学として成り立つ者には無之候。若し理窟の語を広義の方に用ふれば実朝の歌の如き之を理窟と言ひ得べく候へど、併し余の標準に従ふて判

ずれば、これは許すべき理窟の部に属し申候。

斯く申さば一方にて「すらだにも」の如きを許し、他の方にて「も」の一字を蛇蝎視するは如何との不審起り可申候。それは左の如き次第に候。いはでもの事ながら主観的の歌は縦令感情を述べたる者なりとも客観的の歌に比して智力を多く交へたるは不可争の事に候。そは客観的の歌は受身の官能に依ること多けれど主観的の歌は幾何か抽象して現すの労あるがために候。実朝の歌の歌の如き既に全体に於て主観的なるからに「すらだにも」の語左程理窟はく聞えねど全体客観的なる歌に只々一字の「も」の字ある時は極めて理窟はく殺風景に聞え申候。「も」の意善く響けば響く程、益々理窟くさく相成候。これは畢竟前後不調和なるが為にや候べき。余の蛇蝎視する「も」の字は客観的歌中に挿まれたる「意味の強き『も』の字」の事に有之候。併し前にも言ふ如く「梅も桜も」といふやうに二物以上相對物が文字上に現はれたる場合は理窟臭からず聞え候。

序に申候。俳句にては「人もなし」といふ語を「人無し」と同じく用ふれど「人もあり」といふ語を用ふれば「も」の字理窟臭く相成候。これも和歌より来れりと思しく、和歌にて「人もなし」「影もなし」といふは「も」に意味なけれど「……人もありけり」といへば、世の中を喜ぶ人もあるが、世の中を厭ふ人もあるといふやうに相對物ある場合が多きやに覚え候。従つて理窟くさく成りがちにて候。(明治三十一年三月六日)

人々に答ふ

一

歌の事に就きては諸君より種々御注意御忠告を辱うし御厚意奉謝候。猶又或る諸君よりは御嘲笑御罵詈を辱うし誠に冥加至極に奉存候。早速御礼旁々御挨拶可申上之処病氣にかゝり頃日来机離れて横臥致居候ひしたため延引致候。幾百年の間常に腐敗したる和歌の上にも特に腐敗の甚だしき時代あるが如く吾等の如き常病人も特に病氣に罹る事有之閉口の外無之候。

何より御答へ可申かと惑ひ候へども思ひ出す儘に一つ宛可申述候。三月十一日紙上に番外百中十首（松の山人投）として掲げある歌を吾等が変名にて掲げ候やの御尋ね有之候へども右は尽く柿園詠草中に在る歌にて吾等の歌とは全く異り居候。柿園詠草の歌を何人が投じて、如何にして紙上に載せられたるかは固より吾等の知る所には無之候。さて又此等の歌が吾等の歌と相似たるやに評する人も有之候由承り候に付彼歌に対する愚見を述べて其然らざるを明かに致し度存候。

朝風に若菜売る児の声すなり朱雀の柳眉いそぐらむ

此歌は十首中にては第一と存候。全体面白く候へども「眉いそぐらむ」の語巧に失する者と存候。眉いそぐといふ事昔よりいふか否かは知らねども何だか変な言葉なるが上に此処に此の擬人の形容を用ゐるは宜しからず或は若菜売る兒に対して柳眉といひたる者にも候ふべけれど左様なシャレの無い方が却て趣深く聞え申候。尋常に柳が緑になると申度候。

暮れぬめり堇咲く野の薄月夜うすづきよ雲雀の声は中空なかぞらにして

此歌拙く候。「暮れぬめり」とありて「薄月夜」とあるは甚だしき撞著と相見え候。「中空にして」の止まりも甚だ心得難く、或は「暮れぬめり」に返る意にやとも思はるれどさりとては余り拙くや候べき。

行くも花かへるも花の中道を咲き散る限り行きかへり見む

此の如き歌は或は俗受け宜しかるべくや、吾等はたゞ厭味たらしくに感ずるのみに候。咲き散る限りとは何の意とも知らず、若し花の咲いたり散つたりする間といふ意にて長き時間を含む者とすれば八田の「うつせみの我世の限り見るべきは」といひし類にて少しも実情らしき処無し、又時間に非ずして花の中道の長さをいふものとすれば言葉の巧を弄したるのみにて何等の趣味も無之候。併し此歌は全体に厭味あれば一句を論ずるに及ぶまじく候。

桑とると霞わけこし里の児がえびらにかゝる夕くれの雨

此歌さしたる難も無けれど又何の趣も無之候。蚕飼する時節は長閑に感ぜらるゝ者なるに、此歌前半の長閑なるに似ず後半は長閑に感ぜられず、これがために趣味少きにやと存候。えびらといふは如何なる物か知らねども此歌にては桑の葉を摘み入れる筐の類かと思ゆるが不審に存候。俊頼の歌に「山里のこやのえびらに漏る月の影にも繭の筋は見えけり」とあるえびらは家の中に在る器具かと思え候へどそれを桑の葉入れにも用ゐる候にや。識者の教を煩はし度候。

棹ふれし筏は一瀬過ぎながらなほ影なびく山吹の花

「棹ふれし筏」といふ言葉続きも「一瀬過ぎながら」の言葉続きもいと拙く覚え候。「ながら」といひて「猶」と受けたるもうるさく又「なびく」の語も「ゆらぐ」「動く」などに更め候方山吹に適切かと存候。此歌巧ならんとして言葉づかひ無理に相成候。

山里は卯の花垣のひまをあらみしのび音もらす時鳥かな

此の歌尋常めきたれども吾等は厭味を感じ候。此の歌の作意は三四の句にあるべく其の三四が厭味を感じる所に有之候。垣の隙があらいとて忍び音を漏らす訳は少しも無之、それを両者相関係するが如く言ひなすは言葉のシャレと相見え申候。言葉のシャレが行はるゝ処にはいつ

でも趣味乏しく候。(三月二十日)

蚊遣火の煙にとぞ草の庵を人しも訪はゞ水雞くひな聞かせむ

此の歌句法とゝのはず、四五の句に至りて調子抜けが致し候。四の句「人も訪へかし」などいふが如き言葉つきに改めなば少し続きよかるべくやと存候。さるにても「水雞聞かせむ」の句の俗なるは又一段の事に候。

水雞聞くべくとか何とか改め候はんに少し俗気少かるべく候へどもさりとて善き歌にも成り不申候。

一むらの杉の梢に山見えて月よりひびく滝の音かな

上三句は尋常の景尋常の語なれども印象明瞭なる処却て他の巧を弄し詞をひねくりたる歌にまさり居候。惜いかな四五の句上に続き不申候。上三句の景より言へば山は杉林より隔りたる者の如く相見え、左迄近きとは覚えぬに、滝の音とあるを見れば極めて近き山ならざるべからず、是に於て前後の撞著を来し申候。「月よりひびく」などいふ語此の作者の得意の所なるべ

けれど多少の厭味は免れず候。此の歌の作意は滝は見えずして音ばかり聞ゆる故、月中に響あ
るが如くいひなしたる者なるべけれどそれが却て厭味を生ずる種に相成候。若しあからさまに
見ゆる滝の下に立ちて見あげたる時滝の上に月ありとせんか、此の場合に「月より響く」など
やうの形容を用ふるは厭味少かるべく候。

五百重山霧深からし菅笠のしづくも落つる有明の月

此歌の意明ならず、第二句想像の語とすれば旅人などの笠の雫を見て山は霧深からんといへ
るにや、さるにても言葉少し足らぬやうに存候。旅人の菅笠とでも言はざれば三句突然に出て
面白からず候。「雫も落つる」の「も」の字も意味をなさず余儀なき「も」とや申し候べき。
(二首中此歌一首は柿園詠草中に無きやうに覚え候如何の訳にや)

雲かゝるわたのみなかにあら汐を雨とふらせて鯨浮べり

「雨とふらせて」の句此歌の骨子にしてしかも此歌の瑕瑾かきんと存候。簡様な場合には「ふらせ
る」などいふやうな「せしむる」的の語を用ふれば勢を損じて不面白候。寧ろ「鯨の噴いた汐
が雨となつた」と言ひはなす方宜しかるべく候。此人往々此種の句を挿んで雄壮なる歌をだい
なしにする癖有之候。「笠置山あすの時雨をさきだてゝ乱るゝ雲に嵐吹くなり」の如きも四五

の句極めて面白しと思ふに二三句異様の言葉づかひなるがため興味索然と致候。且つ鯨の歌の第一句「雲かゝる」の五字極めて拙く候。斯く言ひては「雨とふらせて」と照応するため此蛇足の語を加へたる痕跡歴々として余り見つとも無く候。且つ「海の真中に雲がかゝる」といふことは聞えぬ言葉つゞきと存候。渺々たる海上にある雲を「かゝる」とはいふべからず候。縦しそれも許して置いた処で「雲かゝる」といへば一片の雲と見ゆる処いと可笑しく候。試みに此歌の景を想像可被成候。海は漫々として広く空は一面に晴れわたりたる処に海の真中に鯨汐を噴けば其鯨の真上ばかりに一塊の雲ある処を描き出だして其が天然の景と見え可申候や。吾等には人間がこしらへた雲とよりは相見え不申候。いつそ雲は無い方が宜しく、若しくは雲の掩ひひろごりたる処を詠むが宜しく候。(三月二十二日)

三

前に挙げたる十首の歌を意味は其儘にて言葉つきを全く改めて投書したる人(下総凡調子)有之候。此人の直し方は極めて尋常に直したる者なれば吾等が非難したる言葉つゞきの無理と厭味とを免れたれど多くは平凡に流れ申候。其二三を挙げんに

おもしろく雲雀さひづる中空に月影見えて日は暮れにけり

言葉つゞきは安らかになりたれど善き歌ともならず。

隅田川堤の桜咲き匂ふ花の下道行きかへり見む

到底厭味を脱却する能はずと相見え申候。

山里の卯の花垣の夕月づく夜しのび音もらす時鳥かな

平凡になりたれど却て原作の細工を施したるにまされりと存候。

五百重山朝霧深み旅人の小笠がさの雲間なくちるなり

「旅人の」の五字を加へたるは賛成に候。結末猶飽き足らぬ心地致候。

青海原沖さけ見ればあらしほを空にいぶきて鯨浮べり

「雨とふらせて」「雲かゝる」の二句を除きたるは至極賛成なるがこれも結末に今一步と思ふ所なきにもあらず候。さはいへど此の歌一番の出来かと存候。

或る人（八王子三田村玄竜子）曰く強き歌には強き調を用ひ弱き歌には弱き調を用ふといふもさる事ながら古今集の如く同一の調にて千態万状を詠みたるも亦面白しと存候。云々。

答へて曰く御説一理無きにもあらず、されどそは古今集の如き文字の巧を弄したる俗調の上

にはいふべからずと存候。歌にていはゞ万葉調、俳句にていはゞ曠野調（みらの）、詩にていはゞ詩經とか何とかいふ極古き調の上に於て始めてしか申すべきにやと存候。極めて古雅なる調を以て詠む時は雄壯なる事も左程に雄壯に聞えず優美なる事も左程に優美に聞えず候へども其代り凡ての物を古雅化して些の俗氣を帯びざる処に一種の面白みあり、故に万葉調を以て凡百の物事を詠まんとならば大体に於て賛成致候。さりながら古今調を以て詠まんとならば大不賛成に候。殊に古今集を目して千態万状を詠みある者かの如くいはるゝは心得ず候。吾等の目より見れば古今集は一態一状を詠みたる者かと怪しまるゝ程に候。

或る人（同）曰く蕪村派の俳句集と盛唐の詩集とを並べたるは不倫と存候。云々。

答へて曰く此不倫とは唐詩を以て勝れりとなす者と存候。さて如何にして不倫とは言はるゝやらん、若し詩と俳句とは詩形に長短あり従つて規模に大小あり故に比すべからずとならば異論も無之候へども、技倆の上に大差ありとの事ならば御同意難致候。李杜王孟の如き詩人を蕪村時代の日本に生れて俳句を作らしめたりとも彼等が蕪村より遙かに立ちまさりたる技倆ありとも信じ難く、蕪村をして盛唐に生れしめなば一屁（は）ツ銚（さ）詩人にて終りたらんとも信じ難く候。乍失敬俳句を十分に研究せずして蕪村の句も月並宗匠の句も大同小異位に思はるゝには無之候哉。歌よみが歌を天下第一の如く思ふと同じく詩人が詩を天下第一の如く思ふも珍しき事にはあらず成るべく公平の御論を願はしく候。或る人自ら屑屋と名のり「屑籠の中よりふと竹の里

人の歌論を見つけ出して之を読むにイヤハヤ御高論……」などいふやうな調子にて長々とひやかされた処誠にひやかしに妙を得たる人もある者かなと感服致し候ひしに何がさて最後に歌論中の只々一箇処に対する長々しき攻撃有之しかも屁の如き攻撃に勢も何も抜け申候。其要領をいへば「躬恆の心あてに折らばや折らむの歌を竹の里人は誤解せり竹の里人は知るまいが白菊に霜置けば赤くなるものぞ躬恆は其の赤くなりて何れを白菊とも分ちかねたる所を詠めるなり物知らぬ奴が歌など解するはかたはらいたし」などいふに在り誠に以て驚き入りたる解釈に候。吾等庭前の白菊も年々赤くなり歌にも白菊の紫にうつろふよし詠めれば白菊は赤くなるものと予ねて承知致居候処屑屋先生の今更高慢に説明せらるゝを見れば遼東に白頭の豕を珍しがりたる如く屑屋先生は白菊を余り御覧なされぬ者と相見え候。さて又「置きまどはせる」といふ語が色の変つた意に取れ可申哉。又其の色の変つた菊を心あてに折らばやなど仰山に出掛けて躬恆が苦心して折らんとしたるにや笑止とも何とも申様が無く候。如何に理窟好の躬恆でも斯様な説を聞いたら嘸かし困り可申候。屑屋が躬恆の弁護などするは最員の引倒しにや候べき。(三月二十四日)

四

千葉稻城子に答へて曰く撞著と誤解の事猶誤解あるが如し。吾等が撞著といひしは前に「客

觀的景色に重きを置き」とありて後に「客觀的にのみ」とありしをいふなり。即ち「重きを置き」は「のみ」と断言したる後の言と意味同じからざるをいふ。

「国歌さへ知らぬ文学者」とは暗に吾等を指したる者か、吾等実に国歌を知らず慚愧に堪へず。されど吾等をして国歌を知らしめざる者半ば吾等の罪にして半ば国歌の罪なりと信ず。何となれば吾等国歌を研究せんとして歌集を繕ひもときしこと屢々なるも何時も四五枚位讀みては最早眠気さして讀み得ぬ迄に彼等はつまらぬなり。凡そ文学的の書は讀みはじむれば知らず覺えず讀み進むものなるに、独り歌なる者に至りては義務的に讀まんとしてさへ、容易に讀み難き者其趣味少きと變化無きとによらずんばあらず。況んや国歌を知らぬ者我等のみにあらず、所謂歌よみなる者も多くは国歌を知らずと思はる。彼等にして若し国歌を知る者ならば国歌の陳腐を感じざる訳なければなり。彼等は三代集と近世歌人中の一二の家集位を讀みて学者と心得居ると見えたり。歌よみに學問させたくは思へども歌以外の學問や外国の文學杯を勧めたとて効力もあるまじければせめては日本の歌集だけ通讀してもらひたき者なり。吾等の如く頭から歌を陳腐に思ふ者は幾冊讀みてもます／＼陳腐と頭痛を感ずるのみにて何の結果も無けれど、彼陳腐な歌を作りて自ら喜ぶ歌よみをして古今集以下の勅撰集を始め代々の歌集をつゞげざまに讀ましめば、まさかに陳腐を感じざるを得ざるべし。

理窟と感情との密に相關係するは前にもいへり、今更繰り返すを用ゐず。只「歌にあらず」と

いふ事につき一言せん。固より歌と歌ならざる者との境界は劃然と分れたる者に非ざれば論理的の厳格なる意味を以て「これは歌なり」「これは歌にあらず」と断定するは歌非歌中間の歌にありては最も難し。殊に普通に歌を評する場合にありては「歌にあらず」の語を誇張的に用ふること多し。即ち悪歌を指して爾しかいふなり。猶悪人を指して「人でなし」などいふが如し。故に此兩者を區別するを要す。又吾等が理窟は歌にあらずといふも大体の論にして一字一語の理窟めきたる者ありとてそれを直ちに「歌にあらず」（厳格なる意味の）といふにあらず。若し厳格にいはゞ毫も理窟なき者は歌なり、全く理窟ばかりなる者は歌にあらずと断言すべし。されど其の中間の者にありては何処迄を歌とし何処よりを歌とせずと其限界を議論的に説明するに由なし。實地に或る製作をとらへて感情にて之を判断するあるのみ。試みに此間の事を言ひ得るだけ言はゞ、一分の理窟あれば一分だけ歌ならざる方に近づき二分の理窟あれば二分だけ歌ならざる方に近づくともいはんのみ。併しそれすら極端に推論せられては過誤を生ずべし。例へば一分の理窟ある製作は些の理窟なき製作に比して一分だけ劣れりなど推論せらるゝが如し。大体に於ては此推論に誤無けれども實地に當りて見れば必ずや多少の除外例を生ぜん。極簡單の理窟を含む歌にて善しと思ふ者あり、些の理窟を含まざる歌にて悪しと思ふ者あるは事實なればなり。若し理窟といふ語を広き意味に解すれば解する程此除外例は多くなる道理なり。（理窟の意義に広狭ある事は「あきまろに答ふ」る文中にいへり）「我身一つの秋に

はあらねど」の歌下二句には理窟を含めり。されど此歌を以て直に「歌にあらず」（厳格なる意味の）とはなさず。但此歌が幾分か歌ならざる方に近づき居るは論を俟たず。

吾等の所謂理窟は理窟なりや否やの疑ありとの事なれども理窟なりや否やは知識上の事なれば疑問となる迄の価値なし。（文学として許すべき理窟なりや否やこそ常に疑問となれ）然れども吾等の用ふる「理窟」なる語が適当なりとか不適当なりとかの疑はあるべし。これならば文字は如何様に変へてもよろし。只々語を以て意を害する莫れ。（三月二十九日）

五

文学の標準といふ事に就きての論要領を得ず。「科学的定義を完全し」云々の語あれども文学の標準は必ずしも科学的定義を附するに及ばず。又完全なる標準とかいふ語あれども完全なる標準と不完全なる標準とは何に因つて區別するか。子は文学の標準なる語を全く誤解せり。「英仏独の文学者すらも」云々の語あるは日本鼠^{ねずみ}鼠^{ねずみ}の人の言葉とも覚えず。子は英仏独の学者が為し得ざりし事を日本人は為し得ずとするが如し。吾等敢て自ら矜るに非ざれどもそれ程迄に西人を崇拜し居らず、それ程迄に日本人を輕蔑し居らず。誤解する莫れ吾等は子の如き西人崇拜にあらず。

文学の標準と吾等の言ひしは何もむづかしき事にあらず。詩文を見、絵画彫刻を見て美なり

美ならずと評するは、評者の胸中に「文学美術の標準」ありそれに因りて評するなり。吾等の言ひし文学の標準といふ者はのみ。即ち英仏独の文学者にもそれ々の標準ありしなるべく支那の文学者にも亦それ々の標準ありしなるべし。子にも標準あるべし。吾等にも標準あるなり。只々古今東西に通ずる標準と言ひしを以て誤解を来たせるが如し。文学の標準といへば古今東西に通ずる事は言はでも善かりしなり。既に標準といふ古の歌を評すると今の歌を評するによりて相異なるべくもあらず、東洋の歌を評すると西洋の歌を評するによりて相異なるべくもあらず、古今東西に通ずるとは此事なり。千人万人の標準が一定せりなどいふにあらず。

西洋や支那の「文学」といふ語の定義などを並べたるは全く無用に属す。何となれば古人の所謂文、文学なる者は吾等の所謂文学と其程度区域に於て相異なる者多きのみならず、全く意味を異にする者さへ少からず。支那にて文を道の意に用ふるが如き是なり。其根柢に於て意味の異なる文の定義などを掲げて駁撃せんとするは見当違ひたるを免れず。吾等の所謂文学は理窟の外に立つ者にて道を載する者などに非ざるなり。吾等の所謂文学は吾等が屢々説明するが如きをいふなり。若しこれも文学といふ語が当らぬとならば美文となり言ふべし。字の定義などを説くは枝葉に渉るの嫌あればこゝに説かず。

文学は実用と娯楽とを兼ねたりとの説固より吾等の説と異なり。(実用の語は普通の解釈に

従ふ) 理学にして文学に属すべきものありといふ事ならば子の所謂文学は吾等の所謂文学と異なる事いよく明かなり。實用即ち教訓を垂るゝといふに至りて益々筋路の異なるを見る。普通の場合にては教訓的の者は文学の範圍外にあり。されど斯かる者をも文学といふとならば子の勝手なり。外人之を如何ともする能はず。只々吾等のいふ文学と性質を異にするといふことを明言して置くに止めん。

「優艶天地を撼かす」といふ語少と変な語なれども其意を察するに優美なる事をいふならん。支那の語にて優美なる詩が天地を撼かすとはいふまじと思へどそれも言葉咎めに類すれば言はず。只特に優とか艶とかいふ字をこゝに出だしたるはかりそめの思ひつきなるべきも和歌の弊風を自ら現したる者なり。歌よみは歌を優美に詠めよといふ、甚しきは優美ならざるは歌にあらずと迄いふ者もあり。是れ歌の腐敗したる一原因なり。吾等をして言はしめば歌を詠むには優美にも詠め雄壯にも詠め古雅にも詠め奇警にも詠め莊重にも詠め輕快にも詠めといはんとす。こゝに用ゐし語は深き意味なしとするも歌が一般に優とか艶とかいふことを離るゝ能はざりしは事実なり。

「国歌の人を鼓舞して忠誠を貫かしめ人を劇奨して孝貞を竭くさしめ」云々「豈翹に花を賞し月を愛で春霞に思を遣り風鳥に心を傾くる」云々の数行文章も変だが議論も変なり。和歌が人を鼓舞し云々したる事もたまにはありしかも知らず、されどそは文学に多くあることにあら

ず。況して和歌の如く無氣力なる者に於てありさうにも無き事なり。「無味の感念」などいふ語奇妙な語にして一寸解しかぬれど何だか花月を愛するを誹りたる者の如し。吾等は花月を賞する上には趣味多し教訓的の事には趣味少しといふ説なれば兎に角大反対なり。(四月一日)

六

「国歌は国歌として独立し」などゝは訳の分らぬ言葉なり。「俳句は俳句として独立し」ともいふべきにあらずや。独立とは他国文学の影響を受けぬといふことか知らねど和歌に漢語を用ふるは前にも言へるが如し。思想の上にも多少漢学仏教の影響を受けたるは事実なり。それでも猶日本固有の処があるとの意味かも知れねど其固有の処が極めて価値無き者ならばなかくにはづかしくて独立などいへた義理に非ざるべし。維新前後の歌などに残つて居る日本固有の部分はその価値無き者ならんと思ふなり。

「文人読者をして新思想を抱かしめ知らず識らず旧思想を嫌悪否定するに至らしむるの用意なかる可らず」とは手段の緩急をいへるなり。吾等は必ずしも「知らず識らず」的の緩手段のみ取らんとは思はず。知りて改むる人もあるべしと信ずるを以てなり。

外国の文学思想を輸入すべしといふ事外国の文学を剽竊せよといふにあらず。剽竊にあらずして輸入する事歌人の腕次第なり。外国文学より得たる思想にても日本歌人の脳中に入りてそ

れが歌となりて再び出づる時は其思想は日本化せられ居らざるべからず。既に日本化せられたる者は日本の思想なり。天真の桜花の人造の薔薇ききびのといふ譬喩ひゆはかたはらいたし。桜花をのみ無上にありがたがりて外の花の美を知らぬ人とは共に美術文学を語り難し。

或る人（秋田県樺園子）曰く万葉の歌は十中八九迄世道人心に關係あれば善し。古今以後の歌は徒に月を賞し花を遊ぶ。故に取らず。云々。

答へて曰く此の如き事は前にも度々言ひたれば今更繰り返すもと思へど猶少しいふべし。歌は世道人心に關係ある故善きにあらず。世道人心に關する歌にて善きもあり悪きあしもあり。歌は花月を弄びたるがために悪きにあらず。花月を弄びたる歌にて善きもあり悪きあしもあり。万葉の中には「田子の浦ゆうちいでゝ見れば真白にぞ不よ尽じの高嶺に雪はふりける」「わかか浦に汐満ちくれば瀾なみをなみ蘆辺をさしてたづ鳴きわたる」などゝいふ歌ありて人も名歌とし吾等も爾か思へり。されど此等は世道人心に何等の關係も無きなり。善を勧め悪を懲らし人を教へ人を導くは道歌しに如く者あるまじ。されど道歌なる者は総じてつまらぬ者なり。

又万葉集を評して「歌は国家治教の道なるにより当時の人は思の儘を述べたる者なり」などいへるは一文章の内既に撞著あり。国家治教とかを目的として歌詠まんには思の儘には詠まれぬ訳なり。思の儘に歌詠みたらんには国家治教などいへる事に關係無き歌も出来る訳なり。実げにや万葉時代の人は思の儘を詠みたらば国家治教などゝは似てもつかぬ歌を多く詠みいでたる

なり。

一般にいへば歌は倫理的善悪の外ほかに立つ処に妙味はあるなり。俗世間の渦巻く塵を雲の上で見て居る処に妙味はあるなり。倫理は徒に善を勧め徒に悪を懲らす傍に在りて歌は善とも悪ともいはず只々此かくの如く愉快に此の如く平和なる場所あることを黙示するなり。世間は名利に趨たり煩惱に苦しめられ掌大の土地の上に氣違ひの如く狂ひまはるを歌人は独り之を余所に見て花に遊び月に戯れ無限の天地に清浄の空氣を吸ひ居るなり。彼俗人だちが歌を善悪の間、俗界の中に求むるは抑々誤れり。(四月二日)

七

「ものゝふの八十氏川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも」の歌を前に八田などの歌と共に挙げてかにかくと論あやひしかば八田などの歌と同じさまに誹りたりと思はれたるにや之を難ぜらるゝ人多し。此歌を八田などの歌と同じ様に見たるにあらざることは其時の文にも記し置きたれど言葉足らざれば意通ぜざりけん。故に今改めて彼歌を例に引きたる訳を申すべし。

世の歌よみに万葉集を崇拜する人あり、古今集を崇拜する人あり。いづれも一得一失はあるべけれど大体の上よりは吾等は万葉集崇拜の方に賛成するなり。併し万葉集崇拜家なる者は多く万葉の区域(否、寧ろ万葉集の或る部分を固守して一歩も其外に越えざるを以て歌に入るべ

き事物材料極めて少く、ために吾人が感得する諸種の美を現すこと能はず。是れ吾等が万葉崇拜家に不満を抱く所なり。故に万葉崇拜家が常に手本として示す所の「ものゝふの」の歌を取りてことさらに云々したるなり。

美に簡單なる美あり、複雑なる美あり。世の文学者或は複雑のみを以て美となす。吾等取らず。人或は吾等を以て複雑の美のみ好むと為す。是れ誤解なり。吾等は簡單の美をも好み複雑の美をも好む。然れども簡單の美を詠みたる歌は複雑の美を詠みたる歌の如く多く出来ざる事は数に於て明なり。例へばこゝに十箇の材料ありとせんに之を一首に一個づゝ用ゐて歌を作りなば十首を得るのみなれど二個づゝを用ふれば九十首を得べく、三個づゝを用ふれば九百首を得べく、四個づゝを用ふれば九千首を得べき割合なり。且つ簡單なる美には趣味の少き物を詠むに不可なれども複雑なる者には趣味の少き物も趣味多き物と配合して用ゐ得る場合多し。又趣味の無き者と有る者とをことさらに並べて反映せしむる事もあるべし。かたゞ以て複雑的の者は多く出来得べく簡單的の者は多く出来得べからざる理なり。然るに和歌なる者は千年來常に簡單の美をのみ現さんと努めたるを以て終に重複又重複、陳腐又陳腐となりたり。(是れ歌の陳腐に流れたる一大原因なり)

「ものゝふの」の歌だけ高く詠まれたる由は前にもいへり。吾等は人丸集中に此だけ高き歌あるを喜ぶなり、万葉集中に此だけ高き歌あるを喜ぶなり、日本文学の中に此だけ高き歌ある

を喜ぶなり。然れども此歌は趣向の最簡單なる者なり。簡單に傾きたる和歌の中にも殊に簡單なる者なり。其たけ高きも此簡單なる処にある者なれどさて之を手本として歌を作らんにはさらでも陳腐なる歌のいよく陳腐ならん事を恐るゝなり。此歌の如き調に倣ひたるは後世にありては恋歌に最も多し。

ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな

吉野川いは波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

春日野の雪間を分けて生ひ出づる草のはつかに見えし君かも

の如きを初としてどの集にもこの集にも此の如き詠み方の恋歌は沢山に見ゆる故に吾等が見ると同じ歌を幾度も繰返して出したかと思ふ許りに陳腐とはなれり。併しこゝに注意し置きたきは吾等が今論じつゝあるは陳腐と否との論にして雅俗の論にあらずといふ事なり。若し雅俗の点よりいはゞ此種の歌は歌の中の雅なる者に属し殊に恋歌の中の雅なる者に属す。恋歌には俗なる者理窟つばき者多き中に此種の恋歌は俗を脱し理窟を離る、右に挙げたる三首の如きは寧ろ恋歌中の佳作なるべし。されど陳腐と否との点よりいはゞ（古今集時代即ち右に挙げたる歌の如きはいまだ陳腐ならず）後世に至るに従ひ此種の歌程陳腐なるはあらず。吾等の歌を評す

るには第一に俗なる者は俗として之れを斥け第二に俗ならざる者の中にも陳腐なる者は陳腐として之を斥く。こゝに論ずる者陳腐の一点に在り。(名所としての「ものゝふの」の歌は次に論ぜん)(四月四日)

八

「ものゝふの八十氏川の網代木に」の歌に名所の特色を現さずといふ事に就きて或る人弁じて曰く網代は宇治田上に限りたる者なれば特色無きに非ずと。網代が宇治の特色なることは吾等も知れり。されど此歌は宇治川も網代木も皆宇治川網代木其物を現さんとの意にはあらで単に下二句の感慨を引き出すための道具に過ぎざれば名所の歌の手本にすべきに非ずといへるなり。言はゞ「山川のみくひにかゝる白波のゆくへも知らぬ」といひても隅田川の百本杭といひても善き様なる処なれば此歌を以て宇治川を詠じたる者とはなし難し。

或る人曰く此の歌の初三句意味無しとはいふべからず、「ものゝふの」とある故下二句に利くなり。それはさる事もあるべし。さりながら「ものゝふの八十氏」といふ意味の語、初に無くとも猶此歌は善く聞ゆるにやと覚ゆ。如何や。

或る人曰く名所の特色いちじるく現れ居らずとも其名所を過ぎて詠みたる歌ならば差支なかるべしと。此説には異論無し。只々名所の特色無き歌を名所の歌の手本として人に教ふるの不

可なるをいへるなり。此「ものゝふの」の歌の如きは名所の歌としては寧ろ変例に属す。因みにいふ名所といふ事に就ては古來歌よみは大なる謬見を抱き居たり。昔の歌よみは所謂名所なる者を一度も見ずしていい加減に歌に詠み込む者なれば其名所の歌といふも多くは其地の特色を現したる者に非ず。只古歌に拠りてどこそこは千鳥の名所なり、どこそこは山吹の名所なりといふに過ぎず。されば其地に千鳥が啼かずとも其地に山吹が咲かずとも固よりそれらに頓著あるべくもあらず、甚だしきは有るか無きか分らぬやうな名所を平氣に用ゐて澄まして居たるのんきさ加減は驚き入りたる次第といふべし。尤も主観的の歌の引合に名所を用ふるは知らぬ処にても差支なかるべけれど、苟も客観的に詠む場合即ち景色を詠む場合には其地を知らざれば到底善き歌にはなるまじ。或は古歌古書に拠り或は人伝つてに聞き或は絵画写真にて其地の大概を知りたる後之を歌に詠む事は無きにあらねど、それすら常にする事にあらず。それを京都の外一步も踏み出さぬ公卿たちが歌人は坐あながらに名所を知るなどと称して名所の歌を詠むに至りては乱暴も亦極まれり。此の如きは古今以後和歌が堂上にのみ行はれたる弊にして、和歌が堂上に盛なりし一事は名所の歌のみならず総ての歌を腐敗せしむる一原因とはなれり。されどこは公卿の罪にあらずして寧ろ在野の人の罪なり。在満等あつままらが和歌は堂上の専有物に非ずと大呼する迄は在野の歌よみは皆堂上方に屈伏して自分を輕蔑し居たりしなり。真淵在満など出でてより後和歌の權は公卿の手を離れたるも其弊習は猶全く之を払ひ去る能はず。蒿蹊あやみが勝地吐懷

篇はの凡例の下に「はた地理は知らでもよみうたにさはりなしといふは世の常なれどたとへば或る名所集辛崎の条下に朝妻読合よみあはせとばかりかけるをみていとまちかき所のやうに読みし人あり辛崎は比叡の東阪本にて志賀郡浅妻は筑間に隣りて坂田郡か湖を中に隔てあはひ十里余やあらん」云々と書けるは幾分か空想的名所歌の弊を看破したるには相違なけれど、さりとて名所を知るは此等の誤謬無からしめんがためのみにはあらざるべし。誤謬無しとて特色無ければ名所の歌にはあらず。

附けていふ、前稿に歌の数を計算する処に錯列法を用ひしは吾等の考へ誤りたるなり。改めて順列法に因りたる計算を記さんに、二箇づつを用ゐたる歌の数は四十五首、三箇づつを用ふれば百五十首、四箇づつを用ふれば三百七十五首となるなり。(四月七日)

九

或る人曰く子の歌は子の歌にてやるが善けれど一々古歌を打ち毀すは不服なり。云々。

答へて曰く「旧思想を破壊し尽し」など前に言ひし故或は誤解を来せしかも知らず。此の旧思想といふは古今集以後今日迄に行はるゝ理窟りくつツほき思想、陳腐なる趣向などを指したるにて総ての古歌の想を含みたるにあらず。吾等が作る所の歌は固より歌の一部分と見ても宜しく半分と見ても宜しく、此等の外に万葉調の歌にて善き者も出来べく古今調の歌にて善き者も出来

べく將た古人の調にもあらず吾等の調にもあらざる一種の新調にて善き歌も出来べく、決して吾等の歌に非ざれば歌に非ずなどいふ狭い量見は少しも持たず。併し古人の歌でも名家の作でも理窟りくツほき思想、陳腐なる趣向は飽く迄批難を試みるべし。

或人曰く古來、歌といひ來りたるは子の作る所の如き者に非ず。されば子の作る所は一種特別の者なれば歌といはずに何とか外の名を用ゐては如何。云々。

答へて曰く面白き事を承る者かな。吾等は歌といふ語を拝借しても宜しからんとの考にて歌と言ひ來りたるもそれが悪しとならば如何にも名づけ給はるべし。俳諧歌となりと狂歌となりと味噌となりと糞となりと思ふやうに名づけられて苦しからず。吾等は名稱などに拘らざるなり。されど言葉の遊びを主とする古今集の俳諧歌と趣味を重んずる吾等の作とは根底に於て同じからざるを忘れたまふな。地ぢぐちシヤレを喜ぶ所謂狂歌と地ぢぐちシヤレを擯ひん斥する吾等の作と立脚地を異にする事を忘れたまふな。それを承知の上でなら何とでも名づけ給はるべし。

或る人曰く吾々が梅が香を鼻に感ずる上はそれを歌に詠まれぬ訳はあるまじ。云々。

答へて曰く固より梅が香を歌に詠まれぬといふ訳は少しも無けれど余り陳腐なる歌多き故前に戲言を放ちたるなり。趣味あるやうに陳腐ならぬやうに詠まば梅が香も好題目なるべし。

或る人曰く漢語にても俗語にても構はず用ふる事になれば無学なる者が飛んでも無い歌をうなり出すやうな弊害を生ぜざるか。

答へて曰く弊害迄を考へらるゝは余程親切な考なれども吾等はその事考へずとも善かるべしと思ふ。弊害は固より起るべし。僅に一ヶ月を過ぎたる今日にてすら飛んでも無い見当違ひの歌はいくらも吾等の几辺に飛び来るを見る。されど弊害は何処にもある事なり。従来のごく歌を詠むには多少古語を学ばざるべからざる時代に於ては如何。歌よみは文法だの語格だの詠み方だのとから威張りに威張りひた拘りに拘りて無趣味なる陳腐なる歌のみを作りしにあらざや。漢語や俗語を用ゐてそれで善き歌を作り得べしとの見込あらば何処迄もそれを用ふることを勧むるが当然ならん。飛んでも無い歌が出て来たならば飛んでもない歌として斥けんのみ。

或る人曰く真淵を評して存外万葉の分らぬ、などゝは片はら痛し。万葉を崇拜しても万葉を摸せざる所が真淵の真淵たる所以なり。云々。

答へて曰くこれも最良の引き倒しには非ざるか。真淵が万葉以外に一派を立てた（一派といひ得べきか否か知らず）のはえらしとするも其一派なる者が万葉より劣りたる者ならんには何の取得かあるべき。吾等は真淵の歌は万葉に劣れりと信ず。寧ろ万葉を模倣したらば最ちつと善き歌を得たらんかと思ふなり。故に彼は万葉の味を解せぬかと疑ひしなり。右は短歌の上なれど長歌に至りては真淵は万葉を摸したり。従つて其値打短歌の上に在りと吾等は思ふ。難者の如きは真淵の長歌を以て短歌に劣れりとなすにやあらん。然らば吾等とは全く見様を異にするなり。（四月十二日）

或る人（玄童子）曰く盛唐の詩集と蕪村派の句集とを並べいふことの不倫と申したるは勝劣の心にはこれなく、につかはしからず類せずなむとの意にて比較其当を得ざるなり、詩形とやらむ規模とやらむ技倆とやらむを云々するに非ず（略）おのれは晩唐諸家の文字に近きやと臆気ながら見受け申候、不倫と申すこと要は蕪村一人の什を盛唐幾多の作家と比擬すること及び晩唐の方には却て比擬すべき作家あらむと思ひ、云々。

答へて曰く吾等は蕪村の句を以て盛唐諸家の什に似たりといひし事なし。「蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か読ませたく」といひしのみ。斯くいひし意は歌の無趣味にして字句のたるみたる弊害を救はんには蕪村派の俳句集を読むが善かるべしとの考にて、特に蕪村派の俳句を挙げたるは其の最も趣味に富み字句しまり居る点に於て他派の俳句に勝るを以てなり。其盛唐の詩集といひたるも亦其趣味に富み字句しまり居るがためなり。されど蕪村派の俳句の趣味と盛唐の詩の趣味と同じといふにはあらず、蕪村派の俳句のしまり工合と盛唐の詩のしまり工合と同じといふには非るなり。又蕪村の俳句は寧ろ晩唐に類似を見るとの説も当らず。蕪村と似たる詩人を求むるに殆ど似よりたる者を見ず。若し蕪村時代の俳句界に似たる者を求むれば清初の詩界最も之れに近かるべし。諸家輩出せし処詩想の精細になり婉麗になりながら俗に墮ちざり

し処など稍々相似たり、されど蕪村を以て清初の誰に比すべきかと問はゞ似たる者を見出だす能はず。

或る人（稲城子）曰く詩聖ホーマーの如きも単に美を愛せりとするか、美にして善なるものを愛せしにあらざるか、云々。

答へて曰く美にして善なるも善し。美にして善悪の外に立ちたるも善し。吾等はホーマーの詩を知らず、果してホーマーの詩は終始「善」を離れざるか。ホーマーの詩「善」を離れずとするも吾等はホーマーに倣はんと思はず、吾等は善悪の外に美を認むればなり。吾等はプラトールが真善美とやらを説いたからとてそれに従はざるべからずとは思はず。吾等の美と信ずる所はホーマーもプラトールも如何ともする能はざるなり。

附けていふ。此等の事を嚴密に論ぜんとならば少くとも「善」の字の定義を定めざるべからず。若し天下の事物を尽く善悪の二に分つといふが如き論ならば格別、普通に用ふるが如く善悪は人間の行為を評するの語とせば天然物は善悪の外に立つ者なり。天然物既に善悪の外にあらば天然物を詠む詩歌にして善悪以外に立つ者多きは当然の事なり。西洋の詩は東洋の詩に比して天然を詠ずる事少き故に西洋人の論には善と美とを一つにするやうの事をいふ者多きにやあらん。西洋人の論なりとて一も二も無く崇拜するは固より愚者の事、論ずるに足らず。況んや西洋とて尽く同一の論のみには非るをや。

或る人(同)曰く足下の理窟として排斥するものは此の善なるべし、然らば足下は此の倫理的思想を棄て、美の一方より歌をよむべしと強ふるものなり、吾人の感情をすて、自然の美を求めよと教ふるものなり、然らば吾人歌を詠まんとして先づ詠むべき趣向を考へざるべからず、云々。

答へて曰く何等の誤解ぞ、何等の愚論ぞ。吾等の理窟とする所は前に屢々いへり、今更理窟と善とを一つにするとはいふに非ず。吾等の美とする所は倫理的善惡に拘はらず、故に美は善惡の外にありても多く存在す、されど美にして善なる者無しといふに非ず。善なる者は美に非ずといふに非ず。何が故に善を排斥すといふか、少しにても善を排斥せんとしたることあるなり。排斥せんとするは美ならざる者のみ。縦令たとひ「善」なりとも美ならずんば固より之を排斥するなり。「倫理的の思想を棄て、美の一方より歌をよむべし」とは半ば吾等の意を獲たり。但し「強ふる」にはあらず。美の感じ無き者に歌を詠めとはいはぬなり。「吾人の感情を捨て、自然の美を求めよと教ふ」とは訳の分らぬ言葉なり。自然の美を感じるも感情なり。感情を捨て、自然の美を求むべきやうなし。或は「倫理的感情を捨て、」の意か。それにしても「自然の美を求めよ」といふは猶誤れり。吾等は自然の美のみ取りて人事の美を捨つる者に非ざるなり。

或る人（春園子）曰く意匠即調てうと云ふ意味を解し得ざるが如き、云々。

（駿台小隠に代りて）答へて曰く調といふ語は古來種々の意義に用ゐられりといへども意匠といふ語と同じ意義に用ゐたる例はあるまじ。調は寧ろ意匠に關係無き音調といふが適當なり。其音調といふ事が縦し意匠と幾何かの關係ありとするもそれは意匠の極小部分との關係なるべく、決して意匠即調といふを得ず。意匠は同じことにても言ひやうによりて調の高くなる事も卑ひくなる事もあるなり。

或る人（同）曰く文学豈独り階級あるを免れ得んや（略）画に於ては本画と浮世画、詩に於ては歌と俳句と皆是同じく社会に必要な美術文学なり、而して又其間各々品格の差ありたるは免るべからざる事実ならずや（略）馬糞を詠み焼芋を詠みたる俳句は縦令文学としては貴重すべき価値を有するとも其品格は遂に高貴なる精神を養ふに適せざるが如し、云々。

答へて曰く文学美術にも品格の差ありといふことは異論無し。品格の善きといふことは普通に事物のゆるやかなる逼せまらざるやうな事をいふ。卅一字の方が品格善しといはゞ先づ可なり。馬糞を詠み焼芋を詠みたる俳句云々といふを以て俳句の品格を論ぜんとするは誤れり。馬糞焼芋を詠みたる俳句の下品なるは俳句其物の下品なるにあらずして馬糞焼芋の下品なるが為なり。卅一字歌を如何に上品とするも馬糞焼芋を詠みたらば下品なること俳句に劣るまじ。又和歌は俳句に比して上品なりといふも極大体の比較にして實際一首一句の品格は其意匠材料音調の上

に係る者多し。歌の下品なる者と俳句の上品なる者とを比較すれば俳句は歌よりも上品なり。世人俳句を知らず、俗間伝ふる所の俗宗匠の句を以て俳句と為す、故に無下に下品なる者とのみ思ふなるべし。試に芭蕉時代蕪村時代の俳句を読め、必ずや思ひ半に過ぎん。又文学の階級といふ語は不穩当なり。上品下品の意ならば品格の高下などいふべし。文学の階級といはゞ品格のみを標準とすべきに非ず。(高貴なる精神を養ふに適せずとは解し難し。思ふに筆到らざる者ならん。)

或る人(同)曰く俳句は下級にある丈不自由も少く範圍も広きは理の当に然るべき所にして感化力を社会の下層にまで及ぼさんとの必要は品格を下したる所以ならずんばならず、云々。

答へて曰く是れ亦同じ誤謬に陥れり。されど其の事は前に弁じ置きたれば言はず。感化力を社会の下層にまで及ぼさんとの必要は品格を下したりとはいたく誤れり。俗宗匠が附点選抜を以て糊口となさんとするには感化力を下等社会に及ぼすの必要あるかも知らず。芭蕉蕪村等が俳句を作るに種々の俗語漢語を用ゐる新材料を用ゐて自由に詠みたりとてそは下等社会を感化せんとにもあらず、又自ら下等社会の人間なるが故に俳句を作るといふにもあらず。俳句を作るは俳句の美を感じたるが故なり。俗語漢語新材料を用ふるは俗語漢語新材料の美を感じたるが故なり。下等社会と何等の關係も無きなり。歌よみは世間知らずにて何でも和歌を本尊に立つる故僻見多し。和歌が堂上におのみ行はれたるが如きは文学界の変象なれども歌よみはそれを平

常と心得たるにやあらん。和歌は長く上等社会にのみ行はれたるが為に腐敗し、俳句は兎角下等社会に行はれ易かりしたため腐敗せり。吾等は和歌俳句の堂上に行はるゝを望まず、和歌俳句の俗間にて作らるゝを望まず。和歌俳句は長く文学者の間に作らるゝ事を望むなり。

(四月二十七日)

十二

或る人(春園子)曰く歌は俳句の長き物なり、俳句は歌の短き者なり、三十一文字なるが故に歌にして十七文字なるが故に俳句なりと思ひ誤り詩形即字句の外に各々異なる節あることを知らざるの輩到底共に詩を談ずるに足らざるなり、云々。

答へて曰く歌俳両者は必要上其内容を異にしたりとの論の妄なること既に之を言へり。されば歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句とは只々詩形を異にするのみ。然れども論者の論の出る所を思ふに今迄の歌と俳句とが上品下品の差別ありとするに基因せるならん。成程大体に於て歌は俳句よりも上品なるべけれど論者の思へるが如くは歌も上品ならず、俳句も下品ならざるなり。論者は前に糞、焼芋といふ例を挙げたれど焼芋の句は古俳書に見当らず、糞小便の句は其角蕪村などに一二句あるのみ。決して俳句に多き者といふべからず。翻つて歌の上に此等下品の材料ありやなしやと見るに矢張之れ有るを見る。

しかも論者の崇拜する万葉集には糞、廁かはやなどを詠み込みたる歌あるにあらずや。上品下品といはゞ糞も廁も下品なるには相違なけれど、さりとて歌の可否を言はゞ万葉集の中にも此糞や廁の歌にも似たる歌あげて数ふべからず、況んや万葉以外の歌をや。そはとにかくに糞の歌も廁の歌も犢鼻よんし禪の歌も腋毛の歌も瘡かさの歌も歌として書に載せられ居る事實は争ふべきにあらず。歌必ずしも尽く上品ならんや。

或る人(同)曰く歌は歌ふといふことを旨として調ぶべき事は亦吾人は万集の歌に依て断ずる者なり云々、万葉の歌は言葉を練り品格高く調ぶるを専らとし之を第一義となし思ひを述べると云ふ方は第二義となしたる者ぞ、是歌ふ者なればなり、然るに世くだつていつしか此の定義は破れけり、故に後世の歌は専ら思を述べると云ふ方に傾きて言葉調などいふ事は思を述べる材料に過ぎざるやうに成りゆきて歌は長く衰へにけり、云々。

答へて曰くこは大間違なり。歌の歌ふべきことはいふ迄もなし。古の歌を歌ひしのみならず今の歌も歌ふなり。日本の歌を歌ふのみならず支那西洋其他あらゆる国の歌は皆歌ふなり。歌ふ者なればこそ五言六言七言などそれ々の調子もあれ、歌はぬ者ならば何しに字数平仄ひょうそくを合すべき。然るに古の歌は歌ひて今の歌は歌はずと思へるは間違なり。但歌ふ調子は古と今と異なるべし、同時代にても人によりて異なるべし。(調子の事は他日詳論すべし)又万葉は調又は言葉を主とし後世の歌は想を主とするといへるも間違なり。万葉の歌に想を主とせる歌少から

ず、否万葉の歌は思ふ儘を詠みたるが多きなり。万葉の調の高きは多少練磨の功無きに非ざるも寧ろ當時の人いまだ後世の如き卑き調を知らず、只々思ふ儘に詠みたるからに却て調の高きを致しゝならん。古今集以後に至りては詩想なる者漸く陳腐に帰し只々言葉の言ひかた言ひまはしをのみつとめて無趣味の歌を作れり。即ち言葉を練るといふ事は万葉時代よりも多くして想の方は万葉時代程に変化せざりしなり。論者の論あべこべなり。

或る人(同)曰く漢土に於ても詩と歌とは確然定義を異にし詩は志を述べ歌は言を永うしと云へるなり、然るに何事ぞや其の志を述ぶるを定義とせる詩に訓して唐歌といひたるは是れやがて歌ふを旨とするなる我國の歌を誤りて漢土の詩と同じく志を述ぶるものとなせるなり、云々。

答へて曰くあまりの事に答へんすべも知らず。論者は支那の「詩」と支那の「歌」と如何なる差異ありとするか、日本の「ウタ」と支那の「歌」と如何なる類似ありとするか。支那の「詩」は志を述ぶるのみにて歌ふ者にあらずとするか、日本の「ウタ」は歌ふ者にして「心と種と」する者にあらずとするか。歌はぬ「詩」、心から出ぬ「ウタ」が世の中に成り立つべしとするか。明治の世に生れて斯かる言をいはるゝやうではチト頼もしからぬなり。今少し奮発して勉強せられては如何。「歌」の字の事はこゝに弁ずる迄も無し、宣長の石上私淑言いそのかみのさくめことばを見るべし。

或る人(同)曰く歌ふを旨とすると思を述ぶるを旨とするとは詠旨に於ても詩形に於ても自

ら其の趣を異にすべきは当然の理義なるが故に、云々。

答へて曰く前にもいふ通り歌はぬ歌も無く思を述べぬ歌もなければ両者は全く一致して分つべき者にあらず。若し兩者其一を欠けば歌とは言はぬなり。されば特に歌ふを主とすといふ歌も無く思を主とすといふ歌も無き筈なり。但世人は緩く歌ふを指して歌ふといひ詩想複雑にして音調亦変化するを指して思を主とすといふにやあらん。(五月三日)

十三

或る人(鳴雪氏)曰く和歌が古来より人を感動せしめたる例少しとの説は誤れり。和歌が人を感動せしめたる例枚挙に遑^{いとま}あらず。或は一首の和歌のために命を助かり領土を帰されしなどを始めとし屢々猛きものゝふを動かしたること歴史伝説の上に詳^{つまひら}なり。子が其例少しといふは子自ら感動する歌少しとの事なるべし。云々。

答へて曰く誠にしかなり。古来人を感動せしめたる例はいくらもあれど其の歌が余りつまらぬ歌にて歌といふ名を与ふるさへいかゞと思ふばかりなればそれ等をば余の考の中へ入れざりしなり。余の考の中に入るべき歌にて人を感動せしめたる例を尋ぬるも一寸思ひあたらざりける故例少しと言ひ放したる者にて余り粗漏なる書き様にぞありし。総て和歌俳句詩などが人を感動せしむる事は必ずしも其和歌などの善きがために非ずして相手(感動する人)と其の場合

とに因る者なり。相手が極めて趣味低き者ならんには趣味低き歌は之を感動せしむる事あるべきも趣味高き歌は却て之を感動せしむる能はず。所謂大声は俚耳りじに入らざる者なり。猛きものふの心を和げなどいへど猛きものふといふ者多くは趣味卑き者なれば彼等を感じせしめたりといふ歌は趣味卑く取るにも足らぬぞ多き。又其歌は歌として取るに足らず従つて其歌の善きに感じたるに非ざるも、其作者が意外に歌など作りしといふ事或は其歌が其場合に善く適合せりといふ事のために人を感じせしむる者あり。例へば小式部内侍が大江山の歌の如く歌としてそれ程の値打も無けれど、歌を得作らじと思ひし人の即座に作りしと其歌が其場合に善く適合したりとのために人を驚かしたりと覚ゆ。又太田道灌が歌を作りて「斯る言葉の花もありけり」と誉められたるが如き歌の善き事が人を感じしめたるよりも寧ろ意外の人が歌詠みたりとの一事は人を驚かしたる者ありしなるべし。貞任の連歌れんがに義家がそを追はずなりたりといふ事宗任が梅の花の歌を詠みて公卿達を驚かしたりといふ事杯事なぐさ実の有無は疑はしけれど、若し此種類の事ありとせば前者はきはどき場合に能くつらねたりといふ事に感じ、後者は思ひがけなき東夷あづまの風流に感じたるに外ならじ。故に此の如き歌は後人の之を見るにも其場合を聯想してこそ幾多の興味はあれ、単独に歌として文学上より批評を下さば三文の値打も無き者比々是なり。されば人を感じしめたる歌は必ずしも善き歌に非ずして却て悪歌拙歌を多しとす。此等歌人ならざる者の場合を除きても、歌人などが贈答送別の歌に感じたる例少からず。されどこも其歌

が其場合に適切なるがために多く感じたるにやあらん。縦し其人は自ら感じたる歌を善き歌と思ひたりとも他の人必ずしもそれを善しとは思はず。余等は伝説に残りたる「歌人の感じたりといふ歌」を見て感動すること少く却て普通に知られぬ歌にて非常の感動を生ぜしむる者多し。

以上述べたる場合、即ち或時或人に限りて感動したる場合を除き、何時にても誰にても感動する歌を見るに猶余は多く之を浅薄と認めざるを得ず。其例として最多数の日本人を感動せしむる力ありと信ずる。

しきしまのやまと心を人間はど朝日に匂ふ山桜花

の歌を見るに余は毫も此歌に感動せられざるのみならず、なか／＼に浅薄拙劣なるを見る。全体の趣向も平凡なれども、斯く此趣向の平凡に聞ゆるは幾何か此の歌を見馴れ聞き馴れたるにも因るべければそは論ぜず。縦し平凡なる趣向なりとも調子高く歌ひなば却て高尚なる歌となるべきを、此歌はまた無下に拙くつらねたる者にぞある。其の大欠点は「人間はど」の一句にあり。上に「人間はど」とあらば、下に「と答へん」と置かざるべからず。「と答へん」の語無ければ「人間はど」の語、浮きて利かず、従ひて厭味を生ずるなり。されど天下多数の人が感動するは此平凡にして解し易き趣向と此厭味ある言葉（人間はど）の働きとにあるべく、宣長の作意も亦こゝに在るべし。宣長の詩趣の解し加減と、天下多数の人の詩趣の解し加減と恰

も一致して此大喝采を博せり。大喝采的の作必ずしも可ならざるなり。余も曾て此歌に感じたる時代あり。されど数年間文学専攻の結果は余の愚鈍をして半歩一步の進歩を為さしめたりと信ず。少しく文字ある者は都々逸を以て俚野唾すべしとなす。しかも賤妓治郎が手を拍つて一唱三歎する者は此の都々逸なり。苟も詩を作る者は雲井竜雄、西郷隆盛等の詩を以て浅薄露骨以て詩と称するに足らずとなす。しかも書生が放吟し劍舞し快と呼び壮と呼び彼等をして怒髮天を衝かしむる者は西郷雲井等の詩ならざるべからず。稍々美文を解する者は、山居士の抜刀の歌を以て粗雑鹵奔取るに足らずとなす。しかも兵士が挺身肉薄敵城を乗り取らんとする時彼等の勇気を鼓舞する者は抜刀隊一曲の歌ならざるべからず。大喝采的の作は概ね此の如し。彼等は平易にして趣味低きを要す。或る時は露骨に叙し或る時は一種厭味の裝飾を用ふるを要す。語を更へて言はゞ多数素人へのあてこみは少数玄人の最も厭忌する方法を取らざるべからず。玄人の婉曲にいへといふ処は之を露骨にいひ、玄人の露骨にいへといふ処は之に厭味ある形容杯を加へ、而して後にあてこみ的大喝采的の作は成る。是れ従来の大喝采的の作なり。故に余は寧ろ大喝采的の作といふ一事を以て其卑俗を証せんとす。然れどもこは過去の事実のみ。未來に於ても此の如くならざるべからざるか否かは疑問に属す。若し文学的趣味を具有して大喝采を博する歌あらば之を以て彼非文学的の作に代へんこと蓋し歌人の職務なるべし。(五月十

二日)

(明治三十一年三月—五月)

「歌話」抄

○歌に原因と結果とを具足せしめんとするは悪し。結果を見て原因を推定するが如きは更に悪し。前に挙げたる景樹の歌、

根を絶えてさざれの上に咲きにけり雨に流れし撫子の花

といふも小石の上に根を絶えて撫子の咲くといふが現在の景色なるを、そればかりにては面白からずとて、更に其原因を探り「雨に流れし」と詠みしなり。これいらぬ事なり。現在の景色即ち結果のみならばその景色相応にそれぞれの趣味ある者なれど、苟も原因などいふ理窟にわたらば、如何なる好き景色もためて打ちこはされて、眼目たる理窟のみ読者の心に残るべし。此理窟を得て満足する読者もあれど、理窟は読者の智識を満足せしむる者にて感情を満足せしむるにあらず。智識を満足せしむるを喜ぶは総て歌を理窟の方面より見る者にして、論ずるに足らず。歌に理窟は無きものとは平生景樹のいひ居りしところ、しかも其人の作には此種の理窟あるなり。

○此頃

何処より浪のもて来し種ならむ鈴菜生ひたり磯の岩間に

(小出繁)

といふ歌を余の評して、これも上三句は下二句の景色の原因にして、理窟に近し、寧ろ下二句の景色ばかりにしたし、といへるに對して、ある人のいふ、若し我等が此下二句ばかりのやうな歌を作りて、歌の先生に示さんには、先生は必ず此歌を評して「ことわり足らず」といふべし云々と。余答へて、ことわり足らざるは歌の真相なり。ことわり足りたる歌は所謂理窟の歌、殺風景の歌なり。歌はことわりの足らぬこそめでたけれといふ。客猶悟らざるが如し。

○現在の景色ばかり詠みては、如何にも作者の働き無き如く思ひし者と見え、昔の歌よみも今の歌よみも何か作者の働きを現すべき主観的の語を雜ふるが常なり。原因を探りて詠み出すなどは其の極端なるが、さなくとも

鳥網張る人にな告げそ山県の朝菜の花につぐみ鳴くなり

(諸平)

の歌の初二句の如きあり。作者の主観を現す事も場合によりて悪しとはあらねど、それならば美なる感を起さしむべき主観を現すべきなり。此歌下三句は郊外の快き景色なるに、上二句あるために全く殺風景となり了れり。鳥が面白くさへづりつつある時、之を聞く人に風流心あらば其鳥の殺さるる場合などを聯想する者にあらず。若しさる聯想の起る事あらば直に興もさ

めはつるなり。歌よみの趣味を解せざる実に言語同断なり。

○此頃の人、紀行隨筆などを書くには、古歌などを間に挿みて文の飾りとする者多し。其歌にして善き歌ならば誠に優にやさしく見ゆる者なれど、歌のよしあしをも弁へざる人のしたる故に、拙き歌を引き出でてことごとしく誉め立つるなどかたはら痛みがいと多かり。殊に恋の事など書きたる少年作者が、恋の古歌など特に掲げ出だしたる、其歌は理窟がちに無趣味なりとは知らざるにや。(七月三十一日)

○

○高崎正風氏いふ、「元來歌の要とするところは紀氏が『心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり』といはれたるこの思ふことをいひ出すにあり(略)徒らに巧妙を人情の外にもとめことさらに造り設くるものは眞の歌にあらざることは今更言ふまでもなきことなり」云々と。貫之崇拝家だけに、貫之の文を挙げて証拠となしあれど、「心に思ふことを」云云といふばかりにては、いはば当り前の事にて、此中に歌のつくりやう、よしあしの標準迄は籠り居らざるべし。此の如き簡單なる文は(論理的の定義となり居らざるはいふ迄も無く)注解のしやうによりて如何やうともこじつけらるべけれど、之を作りし貫之の心の中には、巧妙を人情の外に求むるは眞の歌に非ずなどといふ考なかりし事必定なり。如何となれば貫之の歌は

多く巧妙を人情の外に求め、いたづらにやはらかなる調子と理窟めきたる趣向とを以て、人情も無き卅一文字をあやなさんとしたる跡明らかに見るべく、其撰に係る古今集も亦同調の歌のみを集めたるにて知るべきなり。言葉をかへていはば、古今集は人情的歌を集めたるに非ずして、只やはらかなる調子の歌を集めし者とより外は思はれず。

○どの歌この歌といはんより、古今集を開いて初めより貫之の歌を見んか。第一に

袖ひぢて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

とある、これ理窟なり。立春の日になりしとて其日直に氷の解くる者に非ざるは誰も知り居るなり。それを知りながら、立春といふ語よりわり出したる理窟を詠むは、貫之の人情を解せざる証として見るべし。元来、立春といふ事が理窟的になり易き題なるを、貫之等此歌を詠み置きしかば、是より後の立春の歌は皆理窟ならざるは無き程になりぬ。(此歌、初二句の置きやう殊に拙けれど論外なればいはず)

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

亦理窟なり。「花なき里も」とことわりたる理窟加減は一通りの理窟に非ず。之に加ふるに、「霞たちこのめもはるの」といふ言葉のいやさと、縁語のいやさとありて、鼻もちもならぬ歌

となり了りたり。

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行くらん

此歌は理窟無し。貫之集中の善き者なるべし。

我せこが衣はる雨ふるごとに野辺の緑ぞ色まさりける

人情は漠然としてとりとめなきやうなるが多き中に、又此歌の理窟づめはきびしきものなり。「ふる毎に」といふは理窟づめなり。人情的にいへば「雨が降つて緑になつた」といふか、それでも猶理窟くさからば「野辺の緑に雨ふる」などともいふべし。雨を原因とし緑の増すを結果とするだに多少の理窟は免れぬに、「毎に」とありては理窟づめの評を下さざるを得ず。「衣はる雨」といふ縁語のいやさは又格別なり。

青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のはころびにける

此歌が、巧妙を人情の外に求めざる歌とは、いかなこじつけ論者もまさかにはざる可し。此歌の眼目は「糸」といふ言葉より「綻ぶ」といふ縁語を見つけ出したる処にありて、毫も人情の糸瓜のといふ歌にあらず。歌の下等なること論に及ばず。此等の歌にて貫之が人情外に巧妙を（しかも縁語の如き下等なる巧妙迄も）求むることは十分に知れたり。高崎氏が貫之の文

を曲解したる事も亦共に知るべし。

○艦隊演習といふ題にて高崎氏のつくれる歌に

はなちあふ筒おと烈しいくさぶねならすわざとも思はれぬまで

とある、はなはだしき理窟なり。演習といふ題にかかはりて、訓練の意なくては題意にかなはずなど理窟めきたる考より作りし故、此無趣味に陥りたりとおぼし。筒様なる題は演習の意なくとも差支なかるべく、若し是非に此意を含ませずてはならぬ訳ならば、其事を何処かの隅の方へちよいと置きて可なり。「思はれぬ迄」などと理窟的に結ばれては歌は台なしになるなり。吾初め此歌を見し時より「ならず」といふ言葉、気にかかりてならず。昔より放屁の事を「ならず」といへば、こゝも筒音といふに對して、何となくその事にはあらずやと可笑しく思はるなり。(八月二十一日)

○

○田安宗武たやすけはなむねの天降言あもりごごといふを見て吾はいたく驚きたり。彼は万葉の趣味を解するに似たり。彼は教を真淵に受けたれども、其歌の趣味を取る事は之を真淵よりせずして、直に万葉よりせるならん。真淵は万葉万葉いひて教へしなるべきも、真淵自身には十分に会得せざりし万葉の趣

味を、却て宗武によりて会得せられたるも面白し。宗武の書ける国歌八論余言といへる者の中に額田王の歌

秋の野のみ草かりふき宿れりしうちの都の仮庵しぞ思ふ

といふを挙げて「又仮庵しぞ思ふの詞は、九文字なれば古点を疑ひて、かりほしぞ思ふと読むべきにや、或ひは仮いほし思ふと、よむべきにやなどいふ人もありぬべし。されどもとより歌の句の文字必ずしも定まりたる事にしもあらず。たとへば五文字の所は必ず五文字により、七文字の処は必ず七文字によりたればとてよしとやはすべき。さよみぬとも詞つまりたればあしし。いか様にも口たまりなく聞えさへよければ、五文字の所を六文字にもよみ七文字の処を八文字にも九文字にもよむべし。是いかであしからむや。かへりてすぐれたる詞とこそいはめ」云々と論じたるはたしかに字余りの趣味を解したるなり。然るに真淵は国歌八論余言拾遺といふを書きて之を駁せり。曰く「第五句をかりいほしぞおもふとあるは今の耳にてはあしからず。九文字あまりてかへりてのびやかにこそ聞え侍れ。されどもいにしへはさはよまぬにやと思ひ侍る事は、五百と書きたればいほとよむべけれども、万葉に秋田菟借廬の宿とあるを、後撰集にかりほのいほと入れられしはよみ違へかとも覚ゆれど、古今集に山田もる秋のかりほにおく露はと侍るも、菟庵といふ事なれば古くはかりほとこそよみならひけめ。(中略)是もかりほ

し。ぞ。も。ふ。と。や。よ。む。べ。か。ら。む。云々と。真淵の説必ずしも可ならず。短くつめていふ例あればこ
こもつめて読めとの事なれど、そは長くのべていふ例あれば、ここのもつめて読めといふ反論に
よりて打ち消さるべし。此歌の昔の読みやうは何れにありとするも、とにかくに宗武は長句の
趣味を解したるがために長くのべて読まんとし、真淵は長句の趣味を解せざるがために、短く
つめて読まんとしたる者なる事は、争ふべからず。真淵が「今の耳にてはあしからず」といへ
るは長句の趣味を解したるかと思ゆれど、其の突然らざる事は真淵の歌に長句少きを以て証す
べきなり。歌に於ける真淵の眼孔は宗武よりも遙かに小なりき。

○宗武の歌を見るに調子の上には甚だ得る所ありしが如く、趣向も亦尋常歌人の陳腐平凡千篇
一律なると同日に語るべからず。二三首を挙ぐれば

文月佃ふづきつくだ辺にて

真帆ひきてよせくる舟に月てれり楽しくぞあらむ其舟人は

つかふる人萩の花末に成けるをと申ければ

昨日迄さかりを見むと思ひつる萩の花散れり今日の嵐に

つかふる人萩の下にただある石をと申ければ

萩さける山辺の石は心ありと人や見たらむかりにおきしを

雪のいたうふり積りぬるゆふべ酒のみつつ庭のさま見侍りけるによめ
りける

酒のみて見ればこそあれこのゆふべ雪ふみわけてゆきかふ人は

九十の賀し侍りける人をほぎて

吾や妹や子等はいましにあえぬべしいましは猶も松にあえてよ

学ばざる人を憂へてよめる

学ばでもあるべくあればあれながら聖にてませどそれ猶し学ぶ

薄

み吉野のとつ宮旭とめくればそこもしらに薄生ひにけり

武蔵野を人は広しとふ我はただ尾花わけ過ぐる道とし思ひき

駒 迎

ひだりみぎり馬の寮つかさのさわぐなり貢のこまの今や来ぬらむ

ながめかしはを

もののふのかぶとに立る歟形のながめかしはは見れどあかずけり

其歌はいまだ多く見ざれど佳什は一々に挙ぐるに勝へず。勁健にして高華なり、古雅にして清新なり。吾は実朝以後始めて此人を得たるを喜ぶ。しかも二人共に武門の貴人に生れたる事の不思議さよ。長く和歌の権力を握りて、徒に世に誇り人を侮りし月卿雲客の賤しむべく厭ふべきは今更にいはず、或は古学を窮め万葉を解き、或は古今新古今を崇拜して自ら歌道の宗匠と称する、彼幾多の歌人は果して何する者ぞ（八月二十四日）

○

○宗武が歌の伎倆は其平凡なる者を併せ見て之を知るべし。

春日のかすがの野辺に今日もかも里のをとめら堇つむらむ

誠に平凡なる作なり。されど一字の懈筆無く、一点の俗気無きに至りては全く此人の特色に

して、他人の集中に見るべきにあらず。平凡終に平凡ならず。

ひむがしの山のもみぢ葉夕日にはいよいよ赤くいつくしきかも

所謂歌よみなる者をして此歌を評せしめば、子供のつくりたるやうなりとや笑ふらむ。「いよいよ赤くいつくしきかも」などいへる子供の言葉に似たるだけ面白味あり。此平凡及ぶべからず。

二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にありとふ駿河にもありとふ

これも子供の歌とやいはれん。此子供らしき処即ち此の俗気無き処、此間の趣味を解せざる者は共に歌を語るに足らざるなり。

たてまつる安みてぐらの安らかに守らひたまへ此もろもろを

平凡にして他の奇無き処、調子なだらかにして屈折無き処、神祇の歌の体を得たり。

○宗武は万葉を学びて其骨髓を得たる者、其歌多くは万葉調なり。されど万葉を固守して其範圍を脱する能はざりしが如き無能者にはあらず。其歌に三句切の多き、てには止の多き等、皆万葉以外に得たる所なり。前に挙げたる歌の外に例題一二を示さんか、三句切は

秋深き立田の川はかくぞあらむ入日さす雲のうつる川づら

千歳かねて遊ぶてふこと誠かもむしろ田に今も鶴遊ふなり

てには止は

松の葉の古葉もふれり住の江のあらら松原霰ふれば

かく来ては珍らしみ聞けど此波のよなよな響くあま蛭の伏屋は

○松平らくがう楽翁は宗武の子なれども歌は父に及ばざる事遠し。小細工の人なりしと見え其作悉く小細工なり。

不二のねに立ちものぼらぬ白雲は麓の山の桜なりけり

人ならばいとむ老の手枕に昔変らでかよふ梅が香

咲く花の梢しらみて青柳にまだ夜をのこすあけぼのの空

武藏野は露をひかりの海原や月も尾花の波にただよふ

斯る歌ばかりにてもなければ、総じておうやうなる処は少しも無く、こせこせと重箱の隅を楊枝にてせせる趣あり。彼の老中に任ずるや、冗費を省き賄賂を禁じ遊蕩を誡め驕奢を制する等、消極的良政は之を施すを得たれども、彼は進んで積極的の計画を為す能はざりしが如し、彼の歌は之を証せり。(八月二十六日)

○

○古今集以後何万千の歌尽く同趣向同調子なり。若し後世の人、古き集を読み古き歌を見れば如何に鉄面皮なりとも、如何にのろまなりとも、まさかにあの様に同じ歌は作れぬ訳なり。所謂歌よみは眼を塞いで歌を作りしにやあらん。

○歌を作るには新しき言葉を用うべからず、さりとして古事記万葉の如き余り古き言葉も宜しからず、趣向は新しき事をいふべからず、珍しき物の名などを入るゝは宜しからず、と教ふ。これ人に古歌を剽竊せよと教ふるなり。

○高崎といふ人の口癖に、歌の議論するより自ら歌を作ること多かれ、といふ。もつとも事なり。高崎といふ人も骨折りに歌を多く作りたらんには、今少し歌の味が分りしなるべきにと思ふ。御歌所派にては小出といふ人最も多く作る故に他の人に比すれば一日の長あり。

○例へば螢の歌、虫の歌、雁の歌と其題其題の歌をそろへて見るに大方同じ事なり。昔の歌の同じきのみならず、今作る人の歌も同じ事なり。さるは陳腐なる趣向なりとも始めて其歌を作りし人には珍しく感ぜらるる者故、人が違ふ程同じ趣向の歌が多く出る訳になるなり。若し螢なら螢の題にて歌を作らんと思はゞ、一人にて十首ばかり作る可し。猶陳腐ならば二十首も作るべし。一題を作る事二三十首に及ばゞ稍々陳腐を脱するを得べきか。しかも普通の歌よみなる者は、一題にて二首も作ればはや趣向尽きたりといふ、其趣向の乏しき事笑止の至りなり。

○万葉以後の歌人は源実朝と田安宗武との二人なり。一は征夷大將軍にして一は征夷大將軍の子なり。一は征夷大將軍なれども実権は自己の手にあるにあらず。一は征夷大將軍の子なれども征夷大將軍たる能はざる者。兩者共に高貴の地に居り閑散の地に居り不平の地に居りしが如し。実朝の定家を師とし宗武の真淵を師とする、皆當時の碩学宗匠にして且つ後世に名を伝へ、一流の祖といはるゝ程の人なり。然れども実朝は定家の彫琢に倣はず、宗武は真淵の平凡に墮ちず、共に師承の外に於て屹然として一家を成す。兩者の境遇性質の相類似せる奇と謂ふべし。

○水戸光圀、水野忠邦などいふ人の歌、定めて尋常ならざる者あらんと思ふ。しかも一たび其の家集を見れば平々凡々、俗歌人と扱ふ所あらず。彼等は他に於て得たる如く歌に於て得る能はざりしなり。天保の改革も終に歌に及ぶに暇あらざりしか。

○徂徠の歌として世に伝はる者わすかに一首あり。其歌野卑見るに堪へず。此歌の伝はりしは徂徠の不幸なり。(八月三十一日)

○

○景樹といふ男のくだらぬ男なる事は今更いはでもの事ながら、余りといへば余りなる言ひ草の、傍若無人なるに、腹据多兼ねて鉄の筆もて少しぶちのめしてくれんずと思ふ。若し彼の最貞せん者あらば尽く同罪たるべき者なり。

○其新学異見に

鎌倉の右府の歌は志気ある人決して見るべきものにあらず(略) 右府の歌の如くことごとく古調を踏襲め古言を割裂たらんには(略)

など能くも能くもこんな事がいはれし者かな。実朝の歌に尋常の作(但し俗気ある者と調子のたるみたる者とはなし)多きは、年若くして詠み習ひの者の多きならん。さはれ金槐集中には二三十首の秀歌古今に卓絶し、前後に類例無き者あるを知らずや。「八大竜王雨やめたまへ」といひ「矢なみつくろふ小手の上に」といひ「親もなき子の母を尋ぬる」といひ「われて碎けて裂けて散るかも」といひ「あはれなるかなや親の子を思ふ」といひ「見んと思へど足たたずして」といふ。此等は皆実朝の創意造語に出で殆ど破天荒ともいふべき者なるを、悪口にも事

「墨汁一滴」抄

先日短歌会にて、最も善き歌は誰にも解せらるべき平易なる者なりと、ある人は主張せしに、歌は善き歌になるに従ひいよく之を解する人少き者なりと他の人は之に反対し遂に一場の議論となりたりと。愚かなる人々の議論かな。文学上の空論は又しても無用の事なるべし。何とて実地に就きて論ぜざるぞ。先ず最も善きといふ実地の歌を挙げよ。其歌の選択恐らくは両者一致せざるべきなり。歌の選択既に異にして枝葉の論を為したりとて何の用にか立つべき。蛙は赤きものか青きものかを論ずる前に先づ蛙とはどんな動物をいふかを定むるが議論の順序なり。田の蛙も木の蛙も共に蛙の部に属すべきものならば赤き蛙も青き蛙も両方共にあるべし。或は解し易きにも善き歌あり解し難きにも善き歌ありと思ふは如何に。（明治三十四年三月二十七日）

○

廃刊せられたりといひ伝へたる明星は廃刊せられしにあらで此度第十一号は恙なく世に出で

たり。相変らず勿体なき程の善き紙を用ゐたり。かねての約に従ひ短歌の批評を試みんと思ふに数多くしていづれより手を著けんかと惑はるゝに先づ有名なる落合氏のより始めん。

わづらへる鶴の鳥屋とやみてわれ立てば小雨ふりきぬ梅かをる朝

「煩へる鶴の鳥屋」とあるは「煩へる鳥屋の鶴」とせざるべからず。原作の儘にては鶴を見ずして鳥屋ばかり見るかの嫌ひあり。次に病鶴と梅との配合は支那伝来の趣向にて調和善けれどそこへ小雨を加へたるは甚だ不調和なり。寧ろ小雨の代りに春雪を配合せば善からん。且つ小雨にしても「ふりきぬ」といふ急劇なる景色の変化を現はしたるは、他の病鶴や梅やの静かなる景色に配合して調和せず、寧ろ初めより降つて居るの穏かなるに如かず。次に梅かをる朝といふ結句は一句としての言ひ現はし方も面白からず、全体の調子の上より此句への続き工合も面白からず。此事を論ぜんとするには此歌全体の趣向に涉つて論ぜざるべからず。そは此歌は如何なる場所の飼鶴を詠みしかといふ事、即ち動物園かはた個人の庭かといふ事なり。若し個人の庭とすれば「見てわれ立てば」といふ句似あはしからず、「見てわれ立てば」といふはどうしても動物園の見物らしく思はる。若し動物園を詠みし者とすれば「梅かをる朝」といふ句似あはしからず。「梅かをる朝」といふは個人の庭の静かなる景色らしくして動物園などの騒がしき趣に受け取られず。若し又動物園とか個人の庭とかに關係なく只々漠然とこれだけの景

色を摘み出して詠みたるものとすればそれでも善けれど、併しそれならば「見てわれ立てば」といふが如き作者の位置を明瞭に現はす句は成るべく之を避けて只々漠然と其景色のみを叙せざるべからず。若し此の趣向の中に作者をも入れんとらば動物園か個人の庭かをも明瞭にならしむべし。是れ全体の趣向の上より結句に対する非難なりき。次に此結句を「小雨ふりきぬ」といふ切れたる句の下に置きて独立句となしたる処に非難あり。此の如き佶屈なる調子も詠みやうにて面白くならぬにあらぬど此の歌にては徒に不快なる調子となりたり。箇様に結句を独立せしむるには結一句にて上四句に匹敵する程の強き力なかるべからず。

法師らが髯の剃り杭に馬つなぎいたくな引きそ「法師なからかむ」

(万葉十六)

といふ歌の結句に力あるを見よ。新古今に「ただ松の風」といへるも此句一首の魂なればこそ結に置きたるなれ。然るに「梅かをる朝」にては一句軽くして全首の押へとなりかぬるやう思はる。先ず此歌の全体を考へ見よ。こは病鶴と小雨と梅が香と取り合せたる趣向なるが其景色の内にて最も目立つ者は梅が香にあらざして病鶴なるべし。然るに病鶴は一首の初め一寸置かれて客たるべき梅の香が結句に置かれし故尻軽くして落ちつかぬなり。せめて病鶴を三四の句に置かば此の尻軽を免れたらん。一番旨い皿を初めに出しては後々に出る物のまづく感ぜらるる故に肉汁を初に、フライ又はオムレツを次に、ビステキを最後に出すなり。されど濃厚なる

ビステキにてひたと打ち切りては却て物足らぬ故更に附物として趣味の変わりたるサラダカ珈琲菓物の類を出す。歌にてもいかに病鶴が主なればとて必ず結句の最後に病鶴を置くべしとはならず。病鶴を三四の句に置いて「梅かをる朝」といふ如きサラダ的一句を添ふるは悪き事もなかるべけれどさうなりし処で此「梅かをる朝」といふ句にては面白からず。此結一句の意味は判然と分らねどこれにては梅の樹見えずして薫のみする者の如し。さすれば極めてことさらなる趣向にて他と調和せず。何故といふに梅が香は人糞の如き高き香にあらねば少々遠き処にありて之を聞くには特に鼻の神経を鋭くせずば聞えず。若しスコ〜と鼻の神経を無法に鋭くし心を此の一点に集めて見えぬ梅を嗅ぎ出したりとすれば外の者（病鶴や小雨や）はそつちのけとなりて互に關係無き二ヶ条の趣向となり了らん。且つ「梅かをる朝」とばかりにてはさるむづかしき鼻の所作を現はし居らぬなり。若し又梅の花が見えて居るのに「かをる」といひたりとすればそは昔より歌人の陥り居りし穴を未だ得出ずに居る者なり。元來人の五官の中にて視官と嗅官とを比較すれば視官の刺激せらるゝ事多きは論を俟たず。梅を見たる時に色と香と孰れが強く刺激するかといへば色の方強きが常なり。故に「梅白し」といへばそれより香の聯想多少起れども只々「梅かをる」とばかりにては今梅を見て居る処と受け取れずして却て梅の花は見えて居らで薫のみ聞ゆる場合なるべし。然るに古より之を混同したる歌多きは歌人が感情の言ひ現はし方に注意せざる罪なり。此の歌の作者は果して孰れの意味にて作りたるか。次に

最後の「朝」、此朝の字をこゝに置きたるが氣にくはず。元來此歌に朝といふ字がどれ程必要……図に乗つて余り書きし故筋痛み出し、止め。

こんな些細な事を論ずる歌よみの氣が知れず、などいふ大文学者もあるべし。されどかゝる微細なる処に妙味の存在無くば短歌や俳句やは長い詩の一句に過ぎざるべし。(二十八日)

明星所載落合氏の歌

いざや子ら東鑑あづまかぐみにのせてある道はこの道はるのわか草

此歌一読、変な歌なり。先づ第一句にて子等と呼びかけたれば全体が子等に対する言葉なるべしと思ひきや言ひかけは第四句に止まり第五句は突然と叙景の句を出したり。変な歌といはざるを得ず。或は第五句も亦子らにいひかけたる言葉と見んか、いよく變なり。又初に「いざや」とあるは子等を催す言葉なれども此歌一向に子等を催して何をするとも言はず。どうしても變なり。此歌のために謀るに最上の救済策は「いざや子ら」の一句を省くに如かず。代りに「いにしへの」とか何とか置くべし。さすれば全体の意味通ずる故少々變なれども大した變にもならざるか。そはとにかく前の歌の結句といひ此歌の結句といひ思ひきりて佶屈に詠まる

る処を見れば作者も若返りて所謂新派の若手と共に走りツこをもやらるゝ覚悟と見えて勇ましも勇ましき事なり。次の歌は

亀の背に歌かきつけてなき乳母うははのはなちし池よふか沢の池

いよく分りにくき歌となりたり。此歌くり返して読む程益々分らず、どうしても裏面に一条の小説的話説でもありさうに思はるゝなり。先ず此歌の趣向に就きて起るべき疑問を列挙せんか。第一、此歌の作者の地位に立つべき者は少年なるか少女なるか、且つ其少年か少女かは如何なる身分の人なるか。第二、亀の背に歌書きたるは何のためか、いたづらの遊びか、何かのまじなひか、或は紅葉題詩といふ古事に倣なまひて亀に恋なつかの媒なでも頼みたる訳か。第三、乳母は如何なる素性の女にて、どれ程の教育ありしか。第四、乳母の死にしは何年前にして、病死か、はた自殺か。第五、乳母の死と亀の事と何等の關係無きか有るか。凡そ此等の事をたしかめたる後に非ざれば此歌の評に取り掛る能はず。若しそんな複雑な事も何もあらず只々此表面だけの趣向とすれば丸で狐につまゝれたやうな趣向なり。なぜといふに亀の背に歌かくといふ事既に不思議にして本気の沙汰と思はれぬに、しかも其歌の書き主が乳母である事いよく不思議なり。普通には無学文盲にていろはすら知らぬが多き乳母の中にて特に歌よみの乳母を持ち出したるは何故ぞ。はた其乳母が既に死んで居るに至つては不思議といふも愚なる次第おごなり。さ

れど斯かる野暮評は姑く棚に上げてずつと推察した処で、池を見て亡き乳母を懐ふといふある少女の懐旧の歌ならんか。仮りにそれとして結句ばかりを評すれば「深沢の池」とばかりにては固有名詞か普通名詞かそれも判然せず、気ぬけのしたるやうに思はる。普通名詞としては無論面白からず。小説的固有名詞なりとすれば乳母の名も「おたよ」とか「おふく」とかありたき心地す。以上は此歌を小説的の趣向と見て評したる者なれど、若し深沢の池は實際の固有名詞にして龜に歌書くなどいふ事実もあるものとすれば更に入口を変へて評せざるべからず。併し余り長くなる故に略す。(二十九日)

○

明星所載落合氏の歌

簪かんざしもて深さはかりし少女子をとめじのたもとにつきぬ春のあわ雪

簪かんざしにて雪のふかさははかるときは疊算と共に、ド、逸中いつちゆうの材料らしくいやみおほくしてこゝには適せざるが如し。「はかりし」とこゝには過去になりをれど「はかる」と現在に云ふが普通にあらずや。「つきぬ」とは何の意味かわからず、或はクツ、クの意か。それならば空よりふる雪のクツ、キたるか下につもりたる雪のクツ、キたるか、何れにしても穩かならぬやうな

り。結句に始めて雪を云へる歌にして第二句に「ふかさ」と云へるは順序顛倒ししかも其距離遠きは余り上手なるよみ方にあらず。(三十日)

○

明星所載落合氏の歌

舞姫が底にうつして絵扇の影見てをるよ加茂の河水

此歌は場所明かならず。固より加茂川附近といふ事だけは明かなれど此舞姫なる者が如何なる処に居るか分らぬなり。舞姫は、河岸に立ちて居るか、水の中に立ちて居るか、舟に乗りて居るか、河中に置ける縁台の上に居るか、水上にさし出したる棧敷などの上に居るか、又は水に臨む高樓の欄干にもたれて居るか、又は三条か四条辺の橋の欄干にもたれて居るか、別にくはしい事を聞くに及ばねど橋の上か家の内か舟の中か位は分らねば全体の趣向が感じに乘らぬなり。次に第二句の始に「底」といふ字ありて結句に「加茂の河水」と順序を顛倒したるは前の雪の歌と全く同一の覆轍に落ちたり。「うつして」といひて「うつれる」といはざるは殊更にうつして遊ぶ事をいへるなるべく、此殊更なる処に厭味あり。此種の厭味は初心の少年は甚

だ好む事なるが、作者も好まるゝにや。「見てをるよ」といふも少しいかゞはしき言葉にて「さうかよ」と悪洒落わるじやれでもいひ度くなるなり。(三十一日)

○

明星所載落合氏の歌

むらさきの文ふぼ宮の紐のかた／＼をわがのとかへて結びやらばいかに

「わがのと」とは「わが紐と」といふ事なるべけれど我の紐といふ事十分に解せられず。我文宮の紐か、我羽織の紐か、我瓢箪の紐か、はた其紐の色は赤か青か白か黒か、若し又紫ならば同じ濃さか同じ古さか、それらも聞きたくなきにはあらねど作者の意はさる形の上にあらずして結ぶといふ処にあるべく、この文宮は固より恋人の文を封じ来れる者と見るべければ野暮評は切りあげて、只々我等の如き色気無き者には此癡おろなる処を十分に味ひ得ざる事を白状すべし。一つ気になる事は結ばれたるかた／＼の紐はよけれど、それがために他のかた／＼の紐の解かれたるは縁えんぎ喜き悪あくきにあらずや。売卜先生をして聞かしめば「此の縁談初め善く末わろし狐が川を渉りて尾を濡らすといふかたちなり」などいはねば善いと思ふ。(四月一日)

○

明星所載落合氏の歌

君が母はやがてわれにも母なるよ御手とることを許させたまへ

男女のなからひか義兄弟の交りか何れとも分らねど今の世に義兄弟といふやうな野暮もあるまじく、こゝは男女の中なる事疑ひなし。男女の中とした処で、此歌は男より女に向ひていへる者か女より男に向ひていへる者か分らず。昔ならばやさしき女の言葉とも見るべけれど今の世は女よりも男の方にやさしきにやけたるが多ければ、こゝも男の言葉と見るが至当なるべし。御手とるとは日本流に手を取りて傍より扶くる意にや。西洋流に握手の礼を行ふ意にや。日本流ならば善けれど若し西洋流とすれば母なる人の腕が（老人であるだけ）抜けはせずやと心配せらるゝなり。それから今一つ変に思はるゝは母なる人の手を取ることの許可を母其人に請はずして却て其人の娘たる恋人に請ひし事なり。されど手を取るといふ事及び斯くいひし場合明瞭ならざれば詳しくは評せんに由なし。

この身もし女よめなりせでわがせことたのみてましを男らしき君

「せで」は「せば」の誤植なるべし。「女にて見たてまつらまし」など源氏物語にあるより翻案したるか。されどそれは男の形のうつくしきを他の男より斯く評せるなり。然るに此歌は男

の男らしきを側の男よりほめて「君はなかなか男らしく頼もしい奴だ、僕が女ならとうから君に惚れちよるよ」なご杯いふのであるから殺風景にして少しも情の写りやう無し。前者は女的男を他の男が評する事故至極尤と思はるれど、此歌の如きは男的男だんてきを他の男が評する事故余り変にして何だかいやな気味の悪い心持になるなり。畢竟此歌にて「男らしき」といふ形容詞を用ゐたるが悪きにて、斯かる形容詞は無くてもすむべく、又他の詞を置きてもよかりしならん。(二日)

○

明星所載落合氏の歌

まどへりとみづから知りて神垣にのろひの釘をすてゝかへりぬ

此種の歌所謂新派の作に多し。趣向の小説的なる者を捕へて之を歌に詠みこなす事は最も難きわざなるに只々歴史を叙する如き筆法に叙し去りて中心も無く統一も無き無趣味の三十一文字となし自ら得たりとする事初心の弊なり。此歌も亦同じ病に罹りたるが如し。先ず此の歌の作者の地位に立つべき者はのろひ釘の当人と見るべきか、若し当人が自分の事を叙すとせば「すてゝかへりぬ」といふ如き他人がましき叙しやうあるべからず。又傍観者の歌とせんか、秘密中の秘密に属するのろひ釘を見る事もことさらめきて誠しからず、はた「惑へりと自ら知りて」

と其心中迄明瞭に見抜きたるもあるべき事ならず。されど場合によりては小説家が小説を叙する如く、秘密なる事實は勿論、其心中迄も見抜きて歌に詠む事全く無きにあらねどそは至難のわざなり。此歌の如く「すてゝかへりぬ」と結びては歴史的即ち雑報的の結末となりて美文的即ち和歌的の結末とはならず。つまり此歌は雑報記者が雑報を書きたる如き者にして少しも感情の現れたる処無し。これでは先づ歌の資格を持たぬ歌ともいふべきか。釘をすてゝ帰るなどいふ事も随分變的な想像なれど一々に論ぜんはうるさければ省く事とすべし。妄評々々死罪々々。

(三日)

○
しひて筆を執りて

佐保神の別れかなしも来ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

別れ行く春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちちがてぬ我いのちかも

くれなるの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くところそ人の見るらめ。(五月四日)



岩手の孝子何がし母を車に載せ自ら引きて二百里の道を東京迄上り東京見物を母にさせけるとなん。事新聞に出でゝ今の美談となす。

たらちねの母の車をとりひかひ千里も行かん岩手の子あはれ

草枕旅行くきはみさへの神のいそひ守らさん孝子の車

みちのくの岩手の孝子名もなけど名のある人に豈劣らめや

下り行く末の世にしてみちのくに孝の子ありと聞けばともしも

世の中のきたなき道はみちのく岩りの手の関やきを越えあず

春雨はいたくなふりそみちのくの孝子の車引きがてぬかも

みちのくの岩手の孝子文に書き歌にもよみてよろづ代までに

世の中は悔いてかへらずたらちねのいのちの内に花も見るべく

うちひさす都の花をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも

われひとり見てもたぬしき都べの桜の花を親と二人見つ（五日）

○

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀とこにうち臥してこのかた、年々春の暮より夏にかけてほととぎすといふ者の声しばく聞きたり。然るに今年はいかにしけん、夏も立ちけるにまだおとづれず。剝製のほととぎすに向ひて我思ふところを述ぶ。此剝製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたる者ぞ。

竜岡に家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに

ほととぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剥さかはぎに剥むぎてつくれるほととぎす生なまけるが如し一声もかも

うつ抜きに抜ぬきてつくれるほととぎす見ればいつくし声は鳴かねど

ほととぎすつくれる鳥は目に飽あげどまことの声は耳に飽あかねかも

置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほととぎすかも

ほととぎす声も聞かぬは来馴れたる上野の松につかずなりけん

我病みていの寝らえぬにほととぎす鳴きて過ぎぬか声遠くとも

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほととぎす

ほととぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

歌は得るに従ひて書く 順序なし。(十一日)

○

試みに我枕もとに若干そくばくの毒薬を置け。而して余が之を飲むか飲まぬかを見よ。(五月十一日記)

編集あとがき・解説

亜細亜大学教授 夜久正雄

過日、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎氏から電話で照会があった。正岡子規の「歌よみに与ふる書」を大学生に読ませたいが、文庫本か何かで適当なテキストはないか、ということである。岩波文庫には入っているが、数年前の刊行で、最近は出ていないらしく、手に入りがたいとのこと。調べてみると、角川文庫にも新潮文庫にもない。岩波が鳴物入りで宣伝している「百冊の本」の中にも、茂吉歌集と啄木歌集とがあつて、子規はない。啄木は系統が異なるし、社会主義歌人ということを選んでのだろうから、それはそれでいいとして、子規をはずして茂吉を入れたのは何とも解せない。子規と茂吉とでは、先生と孫弟子という関係ばかりでなく、近代短歌を創造した天才とその一追隨者というほどの相違で、茂吉が生きていたら驚いて苦情を言ったであろう。万葉歌人として人磨をあげないで家持あたりをあげるほどの不見識である。おそらく、茂吉は左翼作家からも重視されている近代的歌人であるが、子規は既に古く、明治資本主義昂揚期の所産で、進歩的でないともいうのであろう。つまり、子規を日本近代思想の正系の中に数えないということになる。子規の歌論がとりあげられないのはこうした意味あいかもしれない……。さすがに、小田村氏の眼力はするどい。こともない問合せだが、おのずから時流の

盲点をついている、と思った。

以前は改造文庫というのがあって、それに子規の「歌論歌話」という一冊があり、もちろん「歌よみに与ふる書」もその中にあったと思う。同じ改造社版の「現代日本文学全集」には、寒川鼠骨編の「正岡子規集」があつて、これは改造社版「子規全集」の抜粋のようなものであつた。昭和三年発行で総ルビつきの親切な本である。私などはもっぱらこの本の恩恵を蒙つた。もちろん、改造社なき今日、入手するのはむずかしからう。

岩波文庫本「歌よみに与ふる書」は、土屋文明編で奥付に昭和三十一年第一刷とある。編者は「日本」新聞掲載の原文に当られたというので、テキストとしての価値は高い。巻末の解説もさすがに光っている。しかし、原文のままのこの表記法でルビもないのでは、いまの大学生には歯が立つまい。

原文の表記法は、歴史的仮名づかい旧漢字体で、それはいいとして、明治時代独得の宛字が使つてある。その上に候文というわけだから、現代の学生にとっては高校時代「古文」で教わる平家物語や源氏物語よりも、もっと読みにくいものになっている。「歌よみに与ふる書」の書かれたのが明治三十一年二月、一八九八年だから、いまから六十四、五年まえ、ということになる。その六十年前の候文を今日の大学生は読めなくなつてしまつたわけだが、これは戦後の「国語教育」の結果なのだから、今日の学生を責めるわけにはゆかない。われわれ大人の、戦後の事大主義にもとづく勝手な妄想で、かなづかいを革命し、漢字の使用を統制して自由を制限した結果、大学教育を受けた者が、数十年前の祖先の記録

すら読めないようにしてしまつたのである。文化は断絶しようとしている。国語の勉強をやめた余力で英語に苦勞している。植民地教育とか愚民政策というのはこういうことだろう。だから、たとえ岩波文庫の「歌よみに与ふる書」が出ているとしても、大学生にそれを読む力がなくなつてゐるので、これでは本も売れるわけではない。では、といって、まさかこれを現代語訳して読ませるわけにもゆくまい。それでは子規の語調が消えてしまうからである。語調が消えるというのは、筆者の情意がなくなつてしまふということである。この情意をとまなわれない灰色の理屈、実行意志のない観念、——つまりイデオロギーを排したのが子規の歌論だ。その歌論から情意を抜きにするわけにはゆくまい。子規のものは、どうしても原文のまま読むよりほかに方法はない。彼此考えあわせるにつけ、子規は遠い忘却の彼方に追いやられてしまつたらしい。

そこで、文庫本の再版を待たずに、われわれの手で翻刻することになつた。ただ前述のようなことを考えたので、「歌よみに与ふる書」第一章だけは総ルビを付した。以下はこれに準じて読んでほしいと思う。ルビは前記改造社版「正岡子規集」によつて、歴史的仮名づかいで付けた。これを一々現代かなづかいにする必要はあるまい。そこまで手をつくさなくても、多少の好學心があればあとは自分でできよう。何ごとでも学ぶのには努力がいる、子規のものはその努力をするだけのかいがあるものとおもう。

子規の文章をよむと、そこにはどこにでも文学、芸術、ひいては人生に対する一つの批判力——つまり子規独特の眼力とでもいったものはたらいしていることがわかる。月並俳句を排撃して蕪村を発見

したのも、万葉復古を唱えて古今集を批判したのも、田舎の小定員小学校に感激したのも、みな子規の眼力のあらわれであるとみられる。そうすると、この眼力を子規はどうやって身につけたのだろうか、という疑問がおこる。その秘密を説くことによって、われわれもまた子規と同じような眼力を身につけることができるのではないか、とおもう。そうおもってその秘密について考えてみることはある。所詮は結果論にすぎないから、その秘密を解き明かすことはできないが、考えてみることは無駄にはならない。そこで少しばかり子規の事業の動機について考えてみることにしよう。

子規が月並、理屈を排撃して万葉復古を唱えたのは、王政復古、明治維新という政治的意志と平行する文学上の業績であったとみられる。徳川時代の封建思想から解放された全国民的活動意志が、子規を動かしたのである。西洋近代文学との接触が子規の独立意志をいやが上にも強めた。子規の眼力はまず俳句の検討によって培われたが、その方法は、今日「俳句分類」という業績によって見られるとおり、およそ俳句とみればいかなるものも見るにしたがって書き写すという、徹底した科学精神によって行なわれたのである。いわゆる徳川三百年の太平の夢が覚めて、いわば一切の価値が崩壊するかに見えた時、子規は、前提をゆるさない周到な検討によってただひとりその眼力をつちかっていた。そういう意味での徹底した客観的科学的精神は、やはり西洋文化との接触によって生まれたとみることができる。その意味でも、子規は明治の子として明治の課題に全身を傾けて答えようとしたとおもう。子規は日清戦争に従軍記者として従軍して病み、爾来その病床にあって仕事をした。その死はいわば日露戦争の前夜であった。しかもその病氣は、幾度か自殺をしようとおもうばかりの苦痛の連続であった。時代からは国

民的緊張感が、個人的境遇からは決死の覚悟が子規を動かしたのであって、これが彼の力強い、飾り気のない文体の秘密であろう。子規はただ単にうまい俳句をつくらうとおもって俳句をつくったのではなく、有名な歌人にならうとおもって歌をつくったのでもなく、単に新しい文体を作らんがために写生文を書いたのでもない、とおもう。子規をその根底から動かしていたものは、単なる文学的嗜好ではない。人生全体に対する態度、その時代を生きぬいてゆこうとする強い意志、そういうものが彼独特の眼力となったものであらうとおもう。

だから、われわれが子規の「歌論」を読むのも、単に歌についての子規の判断の結果を知るために読むものでもなく、単にうまい歌を作る技術を知ろうとするためでもない。もっと大きな目的がある。それが本書刊行の趣旨でもあるので、いろいろあるが、次に二点だけを要約しておきたい。

第一はもちろん子規の精神と思想とをその文章によって味わい、子規に具現された明治の創造的精神を「身説」しようとするためである。維新と復古、革新と伝統とがひとつのものになる所に明治の精神の偉大な特徴があるが、子規はそれを最もよくあらわしている。第二次大戦の敗戦直後は、日本の国土の範圍が明治初年にかえたこと、われわれ日本人はすべて占領軍の支配下に入ったこと、それまでの制度や思想が崩壊したことなどから、国民の多くは絶望と緊張とのおりまざった気持ちで、明治初年、つまり明治維新の精神を回顧したのである。そこからもう一度やり直した、という意気で、日本の復興にとりかかったものであった。そうしてその復興は経済的な面ではほぼ達成された。しかし教育や文化の

面では、そういう復興精神はいまだに表現されていない。そういう今日であればこそ、子規の文章を読むことの意義は大きい。国の独立と自由とを戦いとった明治の創造的精神を学びながら、現状の行きづまりを開拓しなければなるまい。

第二はもちろん歌についての表現力、批判力を子規から学ぶためである。子規の歌論俳話、詩歌という圧縮された形の中で、言葉についての徹底した修練をさせてくれる。言葉は学問の基礎である。われわれは古今東西万人の情意を何によって知ることが出来るだろうか。主として言葉によって把握し判断するほかはない。だから、学問などといわなくても、われわれの生きること自体が、主として言葉によって行なわれている。したがって言葉の修練が人生の基礎となる。子規の歌論は歌と作者の思想との関係を、言葉づかいに密着して精密に論究したもので、これによって、われわれは日本語の基礎的な微妙なはたらきを知ることができる。だから、それが学問、殊に人文・社会科学の基礎的修練としての言葉の研究となるのである。日本語の研究なくして外国語の微妙な表現がわかるはずはない。歌をつくることの意義については、私は人生的に非常に高いものと評価しているが、それについては他の書物にすべてあるので、ここにはくり返さない。

ただ一言だけ。国民文化研究会同人の研鑽する（黒上正一郎先生著の）「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」には、太子の御言葉に読者たるわれわれを直接に接しさせるように導いてくれる大切なものがあると思う。すなわちその書物は、太子の思想、信仰の微妙な息づかいを太子のお言葉によってたどっていく、という研究方法がとられており、殊に太子の残された三経義疏と支那大陸の諸師が残された

諸経疏との違いを、その言語表現の相違についてくわしく指摘されている。この黒上先生の精到な比較研究は、黒上先生がその研究方法の源流を、遠く子規の歌論に求められた、ということができるとおもふ。そう見ると、子規歌論が歌についてだけでなく、広く学問の基礎となった一例をそこに見ることもなろうかと思う。

略伝・著作、正岡子規（しき）、本名常規（つねのり）は、慶応三年（一八六七）四国の松山市に生まれた。

明治二十五年、東京大学の前身、文科大学を中途退学して「日本」新聞（一八八九—一九一四）の記者となり、まず俳句革新にかかり、芭蕉・蕪村の真価を明らかにして写生説を唱え、俳句を江戸時代の因習から解放して、近代俳句の基礎を確立した。「芭蕉雑談」（明治二十六年）「俳諧大要」（明治二十八年）「俳句分類」（明治三十年）「俳人蕪村」（明治三十年）等。

この間、明治二十八年日清戦争に従軍記者となって病み、舟中にて咯血、爾来不治の病床に呻吟した。子規全集二十数巻の執筆は、ほとんどこの病中のものである。

つづいて明治三十年代から、短歌革新にかかり、俳句で体得した写生主義をもとにして、実地体験にとづく作風を樹立し、万葉復古を唱えて古今の月並・理屈の批判に没頭した。さらに新様式として連作短歌を創立して、写実主義的近代短歌の基礎を確立したのである。これは万葉以来の短歌創業であり、古今集序文以来の歌論であり、正に千年に一人の事業であった。「歌よみに与ふる書」（明治三十一年）

「曙覧の歌」「歌話」(明治三十二年)

内側からいうと、短歌、俳句という伝統的の文学様式に、近代生活と近代思想とを表現する力を与えた、ということになる。子規を境にしてそれまでの俳句観、短歌観というものは一変してしまったといえよう。

つづいて写生文に手をつけ、言文一致の口語体の文章の確立に努力した。その随筆は今日でも多数の読者を持っている。科学的思考を受け入れた近代人の客観主義的思想生活を表現しようる文体を創始したわけである。子規自身は、この写生文の創始を新様式という点で一番重く見ている。野球の説明をした文章など説明文の典型である。作品は主として随筆の中におさめられている。「墨汁一滴」(明治三十四年)「病床六尺」「仰臥漫録」(明治三十五年)

明治三十五年九月十九日(一九〇二)東京根岸の自宅で死んだ。享年三十六才。死の前日十八日の俳句三句が辞世となった。

おととひの絲瓜の水もとらざりき

絲瓜咲いて咲のつまりし仏かな

啖一斗絲瓜の水も間にあはず

家は子規庵として保存され、寒川鼠骨翁が管理された。遺稿は国会図書館に寄贈されたとのことであ

る。墓所は、田端の大竜寺にある。たしか陸羯南（くわかつなん）の筆で簡素な墓石が立ち、そばには最後まで子規の看護にあたった母と妹との墓が立っている。

解題 今日一般に短歌というものは作者自身の感動を（それが人生的なものであれ、自然にふれてのものであれ、）ありのまま率直に、五七五七七の三十一音の形式によりこむものである、と考えられている。枕言葉だとか掛け言葉だとか縁語だとか歌語だとかいう、言葉の上だけの修辭は第二義的なもので、そういった知的遊戯は短歌の邪道だと考えている。したがって同時に、万葉集の短歌は歌としてのよさがわかるが、古今集の歌はどこがよいのかわからない、とほとんど誰でも思っている。また、——このことはまだ充分に自覚されてはいないが——現代短歌の中心は連作短歌の形式であるということをも暗黙の中に認めている。数首並べた短歌を別に奇異にも感じない、それはひとまとまりで完成したものである、とうけとっているからである。

こういった近代短歌の本質について、今では自明のこととなっているこういう基礎概念を、われわれは主として正岡子規に負うている。それゆえに今日から見ると子規の言うことは、もうわかり切っていること、というように見える。「地球は円い」という考えをわれわれは自明のこととして考えるから、それを言い出した人のえらさがわかりにくい。子規のえらさは、これと同じなのかもしれない。直接的にせよ間接的にせよ子規によって開眼されたわれわれは、もし子規がいなかったなら、きっと子規以前の短歌概念を抱いていたことであろう。すなわち、われわれは、短歌というものは、古今集風の小手先

の修辭によつて特別な風流心を暗示する上流階級の教養の道具であつて、その修辭的技巧に生命があり、同時に一首独立で完成したものである、と考へてしまつてゐることであらう。したがつてまた、短歌といふものは、科学の勃興した近代文明生活の表現には適さないもの、国民の中のごく一部のものの趣味にすぎないもの、そして既に亡び去つた詩形である、と、まあ、こんなふうになら考へてしまつてゐるにちがいない。子規のような天才でなければおそらくそう考へてしまふことであらう。今日われわれがそうは考へずに、近代短歌の本質を最初に述べたように考へていられるのは、主として子規のおかげにほかならないと思ふ。

科学的真理の発見は、その真理の理解と応用から次の発見が約束されるのであらうが、文学上の価値の発見は、それとはちがつて、それが発見者の思想人生觀の表現であるという点で、科学的の真理とは大いに趣きを異にしてゐる。それゆゑに子規が発見した結果を公式化して、ただそれを模倣するのでは、子規の精神を正しく理解したことはない。ここに、文学上の発見を理解してゆくしかたのむずかしさがある。科学上の真理は、要約して公式化し概念化して傳達することができるが、文学上の眞実は作者の表現と切りはなすことができない、その表現を通してのみ傳達しうるものである。科学上の真理は誰がそれを説明しても同じであるが、子規の万葉発見、古今集批判は、子規の文章によつてこそ、おもしろい。子規のいうことを、ほとんど暗記してしまつていて、子規のいうことの骨子はよくよくわかつてゐても、それでも子規の文章は、読むたびごとに新鮮に感じられ、おもしろいと感ぜられる。つまりそこに子規という人物のすべて、その思想感情が生きてあらわれてゐるからである。子規の歌論は子規

という人間と切りはなすことができない、といってよいほど子規の血と肉とをもった歌論で、子規という人のえらさは、こうしたところに躍如として窺われるように思う。

子規の歌論を全体としてみると、いくつもの点で卓抜していることに気付く。すなわち子規は、子規以前の千年におよぶ古今集崇拜の迷信を打破したという点では雄大、一首一首に緻密な論理的・心理的分析を加えるという点では周到、その生々した表現が六七十年後の今日になっても少しも色あせぬ文体であるという点では大文章家、こうした偉大な仕事をいわば重忠の苦痛の中でやりとげたという点では英雄的である。正に、明治時代の強烈な創造的精神が子規の文章に結晶したかの観がある。その点で、子規は、近代思想の基礎を築いた福沢諭吉や、近代小説の先駆となった二葉亭四迷や、法治国家の基礎となった明治憲法の制定者たちや、東洋の美術と思想とを発見した岡倉天心や、そういった近代日本思想の創造者たち明治の巨人たちの一人であった、ということができよう。さきに私が、岩波文庫「百冊の本」の中に子規が洩れていることを嘆じたのは、実はこういう理由からである。

こうした子規の精神と思想とを最もよくあらわすものが、ここに編集した「歌よみに与ふる書」十章である。この十章は、読者が一読してすぐおわかりになるように書簡体の評論という特異の文体をなしているが、この文体は、子規の思想の独創である。「批評が文学である」ということを、これほどよく示したものはあるまい。それは単なる思想の説明ではなくて、情意の表現なのである。子規の考え、子規の叫び、そのすべてが、ここにこもっているように感じられる。

「歌よみに与ふる書」の内容については(三十八年国民文化研究会「合宿教室」記録)「新しい学風を興すために、第二部」(近刊予定)の中に、北九州若松高校教諭・山田輝彦氏の懇切な解説があると思うので、詳しくはそれを見ていただきたい。

「あきまろに答ふ」「人々に答ふ」は、「歌よみに与ふる書」についての質疑応答のようなもので、補遺の役割をしている。当然併読すべきものである。

「歌話」は、翌年すなわち明治三十二年のもので、前説を補う個所があるばかりでなく、その中の「田安宗武論」は、土岐善曆氏がその大著「田安宗武」の冒頭に子規の全文を掲げて、その一語換うべからざる永久の価値を讃嘆したものである。また、それは子規の歌人論として「橘曙覧論」「平賀元義論」とともに、その眼力のたしかさを示す代表的の評論である。またその中に高崎正風や香川景樹の批判があるが、これは子規が、当代の大家・大歌人と目された人物の歌を批評したもので、権威に屈しない子規の独立心を示すよい例であろう。子規は、徹頭徹尾、明治の豪傑であった。伊藤博文の漢詩をあざわらった子規は、副島蒼海の漢詩に驚嘆し、丸山作樂の「磐之屋歌集」に讃嘆したあたり、その先輩の愚庵、日南との関係とともに、子規をめぐる精神と思想についてはさらにふれたいとおもうが、それは他日を期することとする。子規が、国際日本主義の在野の牙城ともいふべき、当時の「日本」新聞の記者であったということは、単なる偶然ではあるまい。

なお本書の中に、「墨汁一滴」の中から「落合直文評」をとったのは、短歌批評の周到な論理的心理的分析の代表作としての意味からである。またそれについて本書に載せた数例の短歌は、明治三十四

年子規没年の一年前にあたる、約一ヶ月間の短歌であつて、連作短歌という新様式を確立した歴史的作
品となつたものである。他に、鼠骨の入獄をうたつた歌、長詩、長歌その他あげたいものは多かつたが、
紙面の都合上すべて割愛するほかはなかつた。本文は主として改造社版の「正岡子規集」によつた。そ
の編集者の故寒川鼠骨翁に紙上で深く謝意を表する次第である。

附記Ⅱ 発行者からⅡ大学生たちの勉学の資に供するため、急ぎ編集された本書の印刷について、
東京綜合印刷社長久保達男氏が、奉仕的価格で協力してくださつた。ことに旧仮名遣いの原稿
に旧仮名遣いのフリガナをつけるといふ困難なこの作業を、原稿渡しから糸とち製本までを二
週間という現時としては驚異的な早さで完了された熱意に対して、心から謝意を表したい。ま
たそれに合わせて校正作業に従事してくれた十余名の在京社会人・大学生諸氏の労を多とした
と思う。本書出版を記念して上梓の経過の一端を付記させていただいた。

一歌よみに与ふる書一

(他四編)

昭和三十九年三月一日発行
昭和五十一年三月二十日三刷

頒価二五〇円

千一四〇円

著者 正岡子規

編者 夜久正雄

発行者 小田村寅二郎

印刷者 奥村印刷

発行所

東京都中央区銀座
七一〇一八柳瀬ビル

社団法人

国民文化研究会

振替東京六〇五〇七番

